

I-3T91

259-240

259-240

學生之進路

東北帝國大學總長澤柳政太郎序
法學士相良櫻崖著

東京 昭文堂藏版

明治
44. 6. 14
丙午

序

學生時代は人生中最も大切の時期である。此時代の一年は壯年時代の五年十年の値があることも云へる。實に人生の浮沈は此學生時代の方角によつて定まること云ふても誣言ではない。更に換言すれば社會に出て仕事を爲す時に當つては、假令二たび三たび其方向を誤りて、或は業務を轉じ或は失敗を重ねるここがあつても随分取り返しが出来る。その例は世間に澤山ある。然るに若し一たび學生時代に於て進路を取り違へるここがある時には、後に至つて如何に悔悟しても如何に奮發しても一生取り返しはつ

かぬのである。法學士相良君は崎嶇羊腸たる人生をたどりて、審かに社會の實情に通ずる士である。頃日自己の經驗に基き學生の爲めに其進路を示さんとして一書を著はされた。本書に説く所穩健にして且適切なる誠に著者の實歴に由るからである。予は世の學生が本書に依りて、一生中最も大切なる時代の進路を誤るなからんことを切に希望するものである。

澤柳 政太郎

しるす

自序

今や社會は歳を趨うて摯實の風を缺き眞面目の態を喪ひつゝあり、政治も文學も宗教も將た亦民間各種の事業も、皆徒らに表面を粉飾して模稜糊塗を是れ事としつゝあるの狀勢なり。於是乎、城狐社鼠の輩白晝公然社會に横行跋扈して溷濁の波を掲げ奸譎の風を盛にし、公論讜議は爲めに隱没し、彝倫道德は爲に壞敗して、民情の萎靡頹廢將に其極に達せんとす。此時に當て頼む所は唯我純潔無垢なる青年學生諸子あるのみ、諸子は實に時代の後繼者として斯かる頹俗弊風を釐革すべき重責を有する者なり、諸子の任や亦大なり謂ふべし。

春秋に曰く、「得地千里、不如得一賢也」と。吾人は輒近我國の領土の著しく膨脹したるを慶ぶ者なり、殊に古來の懸案たりし朝鮮問題を解決して、鷄林八道を通して旭旗の光に風靡せしめ、此處に振古未曾有の霸業を闢くことを得たるは、

吾人の最も欣快とする所なり。然れども如何に境域は擴張せられ如何に山河は無邊となるも、此處に活動すべき人物にして缺くる所あらんか、能く其領域を完うし民人を綏撫するに由なからんとす、地を獲るは遂に人を得るに如かざる也。

時弊の匡救すべきもの此くの如く、時勢の人物を要求すること亦此くの如し。吾人不敏自ら揣らず、青年學生諸子の進路に一點の光明を與へ、以て之を岐路に救はんとするの念鬱然として禁ずる能はず、乃ち少閑に乗じて秃筆を呵し此一篇を成す所以なり、庶幾くは諸子をして世に處して亡羊の嘆なからしむること得ん哉。

明治辛亥歲季春

於東都築土丘前僑居

著者識

學生の進路 目次

第一篇 立身の行程

第一章 學生の本分……………

頁數

至幸至福なる青年諸子||國民としての本分||家名を重んぜよ||須らく自重すべし……………一

第二章 出世の難關……………

五

人生行路難||入學の困難||好成績を期せよ||誘惑に打勝つべし||卒業後の難關……………

第三章 時代の要求……………

一一

時勢は變遷して止まず||今日の時勢にも缺陷あり||四圍の形勢||獨逸人に學ぶ所あれ||盛に海外に發展すべし……………

學生の進路 目次

第四章 處世の覺悟 其一……………一八

斷じて金錢の世界にあらず||才學も亦恃むに足らず||品性を尙ぶべし||

福澤翁の訓誡

第五章 處世の覺悟 其二……………二四

國家の保護||世界無比の國體||大に古史を講じて敬神の風を興すべし||
謬れる思潮を排す||立憲國民の本能を發揮せよ

第六章 目的の選擇……………三三

舵なき舟衝なき馬||人生短きを憂へず||目的は宜しく遠大なるべし||先
づ自己の天分を知れ||次に時代の趨向を察すべし||架空の妄想に陥るこ
と勿れ||刻苦勉勵の勇氣自ら勃興せん

第七章 學校と實務……………四五

學課に全力を竭すべし||勉學の秘訣||學問は飽くまで必要なり||學問は

常識の涵養に缺くべからず||學校増設の必要||衆愚主義の教育||補習教
育の必要||學問と實務

第八章 職業の神聖……………五八

職業は立身の堡壘なり||職業の獨立と精神の獨立||職業は皆神聖なり||
官尊民卑の弊||趣味の人たれ

第九章 成功の本義……………六六

不健全なる成功熱を排すべし||此くの如きは成功の途にあらず||眞の成
功は天の與ふる所なり

第十章 最後の勝利……………七二

社會は奮闘の舞臺なり||意思の在る所乃ち道あり||社會的制裁の必要||
勝利は最後の五分間にあり

第二篇 精神の修養

第一章 自恃の精神……………八〇

獨立自恃は處世の第一義なり||鐵の如き意氣なかるべからず||茲に感ずべき美譚あり||社會は斯かる腐腸漢を葬るべし

第二章 意思の鍛鍊……………八八

意思の強弱は成敗の岐るゝ所なり||意思薄弱なれば百弊之に乗ず||如何にして意思を鍛鍊すべきか||青年時代の障害||暴虎馮河の勇は之を慎しむべし

第三章 向上の精神……………九八

向上の精神なき者には進境なし||鞏固なる意思と向上の精神||現代に於ける活きたる教訓||獸類にも此くの如き向上發展あり

第四章 着實の思想……………一〇四

空中樓閣は失敗の原因なり||信用は重んずべく投機は慎しむべし||成功者に對する世人の謬想||人は皆一定の收入に依て衣食すべし

第五章 犠牲の精神 其一……………一一〇

犠牲の精神とは何ぞや||我國に於ける此精神の發達||我國の女子と犠牲の精神||一家に於ける犠牲の精神||此くの如き實例あり

第六章 犠牲の精神 其二……………一二〇

國民奉公の觀念||租税と兵役||特に兵役の義務に就て
吾人に與ふる利益||實戰の教訓||百事皆此精神を以て當るべし

第七章 樂天の氣風……………一三二

人生一日も樂天の氣風なかるべからず||不平不満多く
如何にして樂天家たるべきか
足らず||

第八章 身體の訓練……………一三八

身體は活動の根源なり||外國青年間に於ける身體の訓練||如何にして身體を訓練すべきか||身體訓練の偉大なる實例||鞏固なる精神は健全なる身體に宿る

第九章 時代の風潮……………一四五

天下の大勢||政治界の難局||現實主義の流行||反動の思潮

第十章 青年の覺悟……………一五一

職業の缺乏||修學の困難||非常の覺悟を以て難關を擊破すべし

第三篇 各種の進路

第一章 官 海……………一五六

第一節 總 說……………一五六

官吏とは如何なる者か||官吏の種類||官吏の特別なる身分||官海の通弊

第二節 政 務 官……………一六五

何をか政務官といふか||如何にして政務官たるべきか||政務官に必要な素質||政務官の責任||政務官と事務官

第三節 行 政 官……………一七二

何をか行政官といふか||行政官の種類

一 外 交 官 領 事 官……………一七四

何をか外交官といふか||何をか領事官といふか||外交官及領事官の階級如何にして外交官又は領事官たるべきか||外交官領事官に必要な素質

二 内 務 行 政 官……………一八二

何をか内務行政官といふか||内務行政官の種類||如何にして内務行政官たるべきか||内務行政官に必要な素質

三 財務行政官……………一八六

何をか財務行政官といふか||財務行政官に必要な素質

第四節 裁判官……………一八八

何をか裁判官といふか||裁判官の特別なる地位||如何にして裁判官たるべきか||裁判官に必要な素質

第五節 教職員……………一九四

教職員の種類||如何にして教職員たるべきか||教職員に必要な素質

第六節 技術官……………一九七

技術官の種類||如何にして技術官たるべきか||技術官に必要な素質

第七節 軍人……………二〇〇

何をか軍人といふか||如何にして軍人たるべきか||軍人に必要な素質

第二章 民間……………二〇五

第一節 總説……………二〇五

民間に一層の有力者を要す||民間は自由手腕を發揮する舞臺なり||大に紳士道を興すべし

第二節 代議士……………二〇九

何をか代議士といふか||如何にして代議士たるべきか||代議士の任務||代議士に必要な素質

第三節 辯護士……………二一六

何をか辯護士といふか||如何にして辯護士たるべきか||辯護士に必要な素質

第四節 教育家及宗教家……………二二一

教育家と宗教家||如何にして宗教家たるべきか||宗教家に必要な素質及其の覺悟||我國の宗教家に對する特別の注意

第五節 文 學 者 美術家、音樂家……………二二七

文學者、美術家及音樂家如何にして文學者、美術家又は音樂家たるべきか
文學者、美術家及音樂家に必要な素質

第六節 新聞記者……………二三二

新聞記者の地位及其任務如何にして新聞記者たるべきか
新聞記者に必要な素質と其抱負
新聞記事の改善は方今の急務なり

第七節 醫 師 藥劑師……………二四七

醫師及藥劑師如何にして醫師又は藥劑師たるべきか
醫師又は藥劑師に必要な素質

第八節 實 業 家……………一五二

何をか實業家といふか如何にして實業家たるべきか
實業家に必要な素質

附錄 諸學校案内 目次

第一章 總 說……………二六五

勉學地として東京と地方との比較
學校の選擇
監督者の必要
一ヶ月の學費

第二章 政治法律經濟部門……………二七二

一 官立學校……………二七二

二 私立學校……………二七四

三 特種學校……………二八三

第三章 教育宗教部門……………二八六

第一節 教育諸學校……………二八六

一 官立學校……………二八六

二 私立學校	二九五
第二節 宗教諸學校	二九五
一 佛教諸學校(私立)	二九五
二 基督教諸學校(私立)	二九九
第四章 文學技藝部門	三〇六
第一節 文學諸學校	三〇六
一 官立學校	三〇六
二 私立學校	三〇九
第二節 外國語學校	三一五
一 官立學校	三一五
二 私立學校	三一七
第三節 技藝諸學校	三二五

一 官公立學校	三二五
二 私立學校	三三一
第五章 理學工學部門	三三二
第一節 理學諸學校	三三二
一 官立學校	三三二
二 私立學校	三三四
第二節 工學諸學校	三三八
一 官公立學校	三三八
二 私立學校	三四五
第六章 醫學藥學部門	三四九
第一節 醫學諸學校	三四九
一 官立學校	三四九

- 二 公私立學校……………三五四
- 第二節 藥學諸學校……………三五九
 - 一 官立學校……………三五九
 - 二 私立學校……………三六〇
- 第七章 軍事體育部門……………三六一
 - 第一節 陸軍諸學校(官立)……………三六一
 - 第二節 海軍諸學校(官立)……………三六八
 - 第三節 體育學校(私立)……………三七二
- 第八章 農業商業部門……………三七三
 - 第一節 農業諸學校……………三七三
 - 一 官立學校……………三七三
 - 二 私立學校……………三七七

- 第二節 産業諸學校(官立)……………三七八
- 第三節 商業諸學校……………三八一
 - 一 官立學校……………三八一
 - 二 公私立學校……………三八三
- 第四節 主計簿記諸學校(私立)……………三八九
- 第五節 航海諸學校……………三九〇
 - 一 官立學校……………三九〇
 - 二 公私立學校……………三九三
- 第九章 豫備及雜部門……………三九四
 - 一 官公立學校……………三九四
 - 二 私立學校……………四〇一
- 第十章 女學部門……………四〇七

第一節 普通女學校……………四〇七

一 官公立學校……………四〇七

二 私立學校……………四一〇

第二節 女子技藝諸學校(私立)……………四一九

目次終

學生の進路

櫻崖山人著

第一篇 立身の行程

第一章 學生の本分

○至幸至福なる青年諸子

巍々として芙蓉峰の聳ゆる所、洋々として東瀛の水の洗ふ所、皇基鞏く萬世に
 連り國運隆々として八紘に光耀たり。吾人生まれて此盛運に際會し齊して無窮の
 天恩に浴す、是れ何等の幸福ぞや。殊に前途の春秋に富める青年諸子に至ては、

第一章 學生の本分 至幸至福なる青年諸子

立身の行程
の文は
あつて
い

生れながらにして文明の餘澤に霑ひ、東洋強國の民として將に宇内の廣きに濶歩せん。其冠冕を飾るものは即ち光榮ある歴史にして、其前路に輝くものは即ち希望の光なり。諸子が人として生れ出でたるは即ち第一の幸福なり、生れて日東帝國の民族となる第二の幸福なり、殊に我國今日の青年として多望なる未來を有するは即ち第三の幸福なり、是に於て誰か亦諸子の前途を祝福せざるものあらんや。

○國民としての本分

今日の青年諸子の地位が此くの如く幸福なると同時に、一方に於ては其責任も亦甚重大なるものあるを覺らざるべからず。夫れ青年は第二の國民なり、來るべき時代の組織者なり、國家將來の運命を其双肩に負擔するものなり。而して世は益々複雑に赴き、國際間の競争の如きも歳と俱に益々激烈ならんとす。此時に當

て金甌無缺の國體を擁護して、翩翻たる國旗の光に一層の美を添ふるは即ち青年諸子の任務なり。然れども是は將來の事にして今日泰平の世に於て國家は直ちに諸子の努力を必要とするものにあらず、木戸大久保西郷の諸豪を始めとして、伊藤山縣井上大隈の諸氏が若冠身を挺して國事に奔走したるが如きは以て今日の範とすべきにあらず、抑々維新の大業は國家の一大變革にして、彼等維新の功臣は即ち亂世の風雲兒なり。今は即ち泰平偃武殊に上下の秩序整然たるものあるを以て諸子は唯教育勅語に垂示せらるゝが如く、學を修め業を習ひ以て智能を啓發し徳器を成就して忠良の臣民たることを心懸くれば即ち十分なり。唯一朝事あるに際しては國民として義勇奉公の覺悟を必要とすることあるのみ。然れども社會上新陳代謝の理勢に依り、諸子の時代も亦早晚來らんとす、此時に際して國民として大に活動し大に貢献する所あらんと欲せば即ち大なる準備を必要とす、諸子は即ち今の時に於て心身を練磨しつゝ大に學ばざるべからざるなり。

○家名を重んぜよ

○忠孝は我が國立國の大本なり、歐米諸國に於ては個人主義發達して著しく個人の權利を重んじ、個人と國家との間に何等の制度を認めざるの結果、忠孝の道も亦我國に於けるが如く熱烈なることを得ず。我國に於ける家族主義は文明國として除外例たる一つの特色なり、祖先を敬ひ家名を重んずるとは吾人の服膺しつゝある教訓中最も肝要なる一個條なり。而して此祖先崇拜の觀念に基く家族の制度は忠孝の道の源泉にして、吾人は實に家族主義の搖籃の裡に成長したる者なり。諸子が笈を負ふて他郷の學窓に在るの時、夢魂豈馳せて家郷に入るの時なからんや、諸子の父母も亦家に在りて只管諸子の身を思ひ、俛指して諸子の成業を待ちつゝあり。思一たび茲に至らば誰か發奮して學に勉めざるものあらんや。諸子にして其本分を曉らんと欲せば切に其家を思ふに如くはなし、家を思ひ、父母を思ひ、弟

妹を思ひ、以て日々の課業を完全に果すことを得べきなり。

○須らく自重すべし

要之青年諸子は、小にしては一家の後繼者として、大にしては一國の臣民として、自己の立場を明にし、併せて日進月歩の時勢に注目し、以て深く自重する所なかるべからざるなり。西諺に曰く、「自ら重んぜざる者は自ら棄つるなり」云。

第二章 出世の難關

○人生行路難

李白の詩に曰く、噫吁戲危哉高哉、蜀道之難難於上青天、然れども人生行路の難きは蜀道の嶮難なるよりも尙一層難からんとす。白居易之を吟じて曰く、太行之路能摧車、若比二人心、是坦途、巫峽之水能覆舟、若比二人心、是安流と。他に之

を譬ふれば渺漫たる海洋に一葉の扁舟を行るが如し、或は猛烈なる暴風に帆を裂き、橋を折られ、或は澎湃たる怒濤に擢を摧き、櫓を失ひ、或は意外の暗礁に衝突して船底を破らるゝ等、實に一瞬も油断することを得ず。殊に世の進歩するに従て限りある土地の上に人口は益々増殖し、生存競争は歲月と共に益々激甚ならんとす。之を吾人が僅々二三十年間の記憶に徴するも、生活の問題に著しき激變を來したるを觀る。吾人の郷里に近く山間の僻村あり、嘗て其住民は山に狩し川に漁し野に耕して生活に何等の不自由なく、一郷を擧げて淳朴敦厚の風を存し、一たび此郷に脚を入るれば悠々たる太古の樂園に入るが如き思ありしもの、今は即ち山河は荒廢し地方は遞減し、人口の増加と物價の騰貴とに依て生活は益々困難に陥り、人情も亦隨て浮薄に傾き、疲弊の極遂に墳墓の地を守るに堪えず、涙を吞で遠く他郷に移住を企つる者頻々たるの有様なり、何ぞ其悲惨なる。吾人は此くの如き状態を目撃して人生の行路歳と俱に益々慘憺たるべきを想像せずんばあらざるなり。

○入學の困難

然れども小學を卒り中學を経て高等の學校に進まんとする青年學生諸子に取りて生活は多くは第二の問題なり、最も直接にして且適切なる問題は即ち學校の關門を入ることなり、志望の校舎に入るの問題なり。今や全國を通じて大學の數は僅かに五指を以て屈するに足り、之が豫備校たる高等學校も亦僅かに十指を以て數ふるに足れり、其他農商工法醫軍事等に亘りて専門の學校も亦各々數者に限らる。此等の限りある學校を以て全國幾百の中學校より出す所の多數の卒業生を收容するに足らざるは火を賭るよりも明かなり、是に於てか高等の學校は皆嚴重なる入學試験の關門を設けて、其扉を高くし其濠を深くし、以て海嘯の如き勢を以て押寄する志願者を阻止せんとしつゝあり、故に年々入學者の志願者に對する比例は多く十の一を出でず、多數は皆失望の淵に沈淪するもの、如し。諸子は先づ志

望の學校に入らんとするに當りて、非常なる苦心と忍耐とを要すべきなり。

○好成绩を期せよ

次に起るものは即ち成績の問題なり、諸子は先づ學校に於ける成績の良否は其の人の一生に如何に重大なる影響を有するかを知らざるべからず。今の世に於て社會は學校と殆んど無交渉なり、諸氏の才能學藝に對して社會は全く盲目なり。隨て諸子が他日學校を出で、社會に立つの時、社會は一に諸子の學校に於ける成績に重きを置き、之に依りて其採否を決定せんとす、故に學校に於ける成績表は諸子を社會に導くべき唯一の紹介狀なり。勿論學校の成績如何に拘らず社會に立て非凡の天才を發揮する者なきにあらざれども、此くの如きは眞に例外なり、諸子は先づ學校に在ては最上の成績を擧ぐることに努力せざるべからず。

○誘惑に打勝つべし

學校に在て好成绩を擧ぐるにつき最も注意すべきは社會の誘惑なり。一言にして之を言へば社會は誘惑を以て充たされたり、殊に諸子が修學の地は多く都會にして、都會は最も誘惑に富める危険の地なり、一步門を出づれば即ち酒樓あり、飲食店あり、寄席あり、球場あり、此等は皆誘惑の關門なり、青年純潔の氣風を墮落せしむべき機關なり、假令心して狹斜の巷に遠かるも此等の誘惑に陥れば即ち墮落の第一歩に踏み入りしものと謂はざるべからず、是に於てか最早純潔無垢なる學生にあらざるなり。凡そ青年修學の時代に在ては社會に近づき社會を研究せんよりは、寧ろ自然を友とし自然を研究するを以て勝れりとす。砂塵濛々たる熱鬧の衢に、電車の響の轟々たるを聞かば心自ら濁るを覺えん、青空一碧離々たる廣野に雲雀の中天に囀るを聞かば心自ら清きを覺えん。紅塵萬丈の都會は到底學生修學の場所にあらず、吾人は諸子が可及丈地方に於て學習せんことを勸むるものなり。之を聞く英國の名流は倫敦に出でずして多く蘇國の山間に出づと、

左もあらん哉。

○卒業後の難關

諸子は幸にして目的の學校を卒業するも、卒業後の困難は又容易ならざること
を思はざるべからず。一たび學校の門を出づれば最早學窓の人にあらずして紛々
擾々たる社會の人なり、混濁せる社會の中に游泳して而も溺没せざるの勇氣と覺
悟とを要す。殊に社會の實務は學校の窓を通して眺めたる所と大に異なるを
發見すべし、況んや幾多の先輩と競争者との間に立て、優勝の月桂冠を贏ち得ん
ことは尋常一様の事にあらざるなり。諸子は社會活動の出發點に立て、先づ司馬
相如が「大丈夫駟馬に乘らざれば再び此の橋を渡らず」と題して故郷を發し、遂
に一流の大學者となりたるが如き不屈の決心を有せざるべからざるなり。西諺に
曰く「有望の青年多し而も成業せるもの少し」と、戒しめざるべけんや。

第三章 時代の要求

○時勢は變遷して止まず

昨是今非、時勢は潮流の如く變遷して止まざるものなり。便利なるものは貨幣
なり、然れども天保錢は今の世に通用せず。頭髮は人の重んずる處なり、然れど
も丁髷は今日力士以外に蓄ふる者あるを見ず。制度文物風俗習慣を始めとして
形而上の道德思想に至るまで、國に依り土地に應じて古來幾多の變遷曲折を重ね
つゝあり。勝海舟南洲翁を詠じて曰く「夫れ英雄は大觀す」と、英雄ならざるも
時勢を察し時勢に従て進退せざる者は必づ世の落伍者たるを免かれず、是れ即
ち才學彬々として而も世に容れられざる者ある所以なり、諸子は必ず無用の長物
たるべからず思はざるべからざるなり。然れども徒らに時代の不健全なる思潮に
阿ねり好んで濁流を揚ぐる者の如きは最も擯斥せざるべからず、是れ亦辨別を要

する所なり。

○今日の時勢にも缺陷あり

明治維新の大革命は、嘗に鎌倉幕府七百年來の封建制度を顛覆したるのみならず、社會百般の面目を一新したるものなり、舊日本の装は全く之を棄て、殆んど新なる國家社會を建設したるものなり。此くの如きは實に振古未曾有の事に屬し、舊時代の人を以て之を觀れば、恰も天の窟戸を推開いて天日を仰ぐの觀あるべし。覆載の間國を成すもの幾百、史を緝けば其變遷と進歩との跡歴然として明かなり、然れども何れの國の史實か能く我が明治年代の進歩に比すべきものあらんや、然り明治の進歩は實に古今東西に比類なき長足の進歩にして、歐米人も亦其急激なる發達に驚かざる者なし。四十有餘年の歲月は此くの如き大なる發達に對して餘りに短少なり、隨て其進歩には幾多の缺陷あり幾多の不自然なるものあるを免か

れざるなり。政治法律に關する制度は暫く之を措き、青年學生諸子に最も深き關係ある教育制度に就て一言すれば、今日の教育は餘りに形式に流れ末技に走るの弊あるを觀る。即ち學校に於て教ふる所は單に智識技能に限られ、大切な人格の教育に就ては全く見るべきの施設なしと云ふも過言にあらず、故に今日の學校は智の人才の人若くは技藝の人を出すべきも、能く人物を出すこと能はざるなり。方今政治家として重きを爲す者の中多くの武官出身者を見出すのみならず、軍人社會に於て比較的堅剛なる人物に富めるが如き觀あるは、此社會に於ては他に比して最も人格教育を重んずるが爲めにあらずや（論功行賞後の軍人社會には奢侈の風盛なりとは果して眞か）。吾人は今日の青年諸子が深く此點に留意して奮勵琢磨以て時代の弊を蒙らざらんことを希ふものなり。

○四圍の形勢

翻て眼を宇内の大勢に注げば、國家の青年諸子に待つ所のもの甚大なるものあるを看取せずんばならず。我國維新以來の發達が如何に急激なりしにせよ、最初約三十年間は内部の發達を遂げたるに過ぎざりしなり。然るに日清の役起りて我國の聲望世界に轟き、次て日露の大戦を経るに及んで、宇内の強國として一等國の班に列し、國家の責任及負擔も亦非常に重きを加へたり。試に歲計豫算の膨脹に就て之を觀るに、明治二十八九年迄は一億餘萬圓に過ぎざりしもの、三十年には二億餘萬圓となり、三十七年には三億餘萬圓となり、翌三十八年には一躍して五億餘萬圓となり、今期議會に提出せられたる四十四年度の歲計豫算は實に六億餘萬圓に上るに至れり。之を歐米諸列強の歲計に比較するに、彼等は多くは十億萬圓以上の歲計を計上するに依り、我國の六億餘萬圓は猶少額なるが如きの

感あれども、是れ唯皮想の見解にして、其實我國の負擔は却て歐米諸國に比して勝るものありと謂ふべし、蓋富の度に於て彼此非常の懸隔あればなり。即ち各國の貿易年額を觀るに、英佛獨米等の諸國は皆我國のそれに比して五倍し七倍し若くは十倍するにも拘らず、歲計は僅かに二倍若くは三倍に過ぎざればなり。由是觀之、今日我國民は其富の度に對して比較的、多額の負擔を擔ひつゝあるものなり。方今國際競争の激烈なる各國競て軍備を擴張するの結果、能く財政難を訴へざるもの甚尠しと雖も、新進貧弱なる我國の如きは殊に重大なる負擔に苦しむつあるものと謂はざるべからず、加ふるに今や東洋の天地は列國競争の燒點たらんとし、近く「パナマ」運河の開鑿成るの日に於ては東西の航程著しく短縮せられ、太平洋は徒らに名のみにして何時此處に風雲を捲起することなしと謂ふべからず。是に於てか諸子の責務は自ら明かなり、國家は先づ實業界に有爲の人物を必要とす、政治家として偉大なる人物も必要なり、軍人として卓拔なる人物も

〇〇〇〇〇〇〇〇、其他學者教育家技術家等、如何なる方面と雖も諸子の好む所に向
缺くべからず、て畢生の力を盡し、以て多事多難なる祖先の國を泰山の安きに置かざるべからざ
るなり。

〇獨逸人に學ぶ所あれ

此くの如き時勢に際して獨逸人の堅忍と勤勉とは大に學ぶべき所あるを一言す
べし。彼れ獨逸は歐洲諸強國の間に介在し、地位として甚不利なるのみならず、
地味其他の天恵に浴することも亦甚薄く、之が富強を圖るは實に容易の業にあ
らざりしなり。而も獨逸人の勤勉力は能く總ての障礙を排除して天産を興し製造
を盛にし貿易を擴張して、今は却て佛埃露の諸國を凌駕し、歐洲第一の富強國た
る英國の壘を摩せんとしてあり、彼等が利に敏にして稍く品格に乏しき觀ある
は吾人の感服せざる所なれども、其勤勉力行の點に至ては實に吾人の模範とする
に足れり。

〇盛に海外に發展すべし

點々たる列島眞に東海の一粟とも稱すべきは我國の形勢なり、然れども英國は
同じく島國にして世界に覇を稱しつゝあり、地圖を披いて地球の到る處「ユニオ
ンジャック」の翻らざる所なきを見ては竊かに英人の誇りを推憶せずんばあらざ
るなり、吾人豈狭小なる天地に踟躕すべけんや、殊に我國の人口は世界に於て最も
稠密なるもの、一つにして、其増殖力も亦著しく一年に五六十萬人宛を増加
しつゝあり、此勢を以てすれば久しからずして人口の過剰に苦しまんことを、勢
吾人は海の外に發展すべき運命を有するものなり。近頃臺灣樺太朝鮮等を併せて、
日本人の活動範圍も亦著しく増加せられたれども、吾人は尙世界を以て家とな
すの覺悟なかるべからず、諸子は宜しく學窓に於て世界的の智識を涵養し、進ん

で天下の廣きに濶歩するの勇氣と先見とを有せざるべからざるなり。

第四章 處世の覺悟 其一

○斷じて金錢の世界にあらず

夫れ金錢は金錢として尊むべきものにあらず、或は日用の費途に供せられ、或は事業の資本として使用せられて、初めて其用をなし其價値を認めらるべきものなり。然るに世人或は金錢の價値を妄信し、只管之を蓄積せんことにのみ熱中して其利用すべき物なることを知らざる者あり。此くの如きは即ち金錢を使役すべくして却て金錢の爲めに使役せらるゝものにして眞に憐笑するに堪へたり。抑吾人が一ヶ月間若くは一生の間に必要とする所の金錢には自ら極度ありて、此極度を越えて之を費消すれば百弊茲に生じ、遂に其人格を傷ふに至るべきこと、恰も劇毒藥が一定の分量までは藥品としての効能あれども、其極量を過ぐれば却て身體に有害なるが如きなり。鉅萬の富も死後は自己に何等の用なきのみならず、却て後繼者を累するの例甚多し。縦し一錢の遺産なくとも、後繼者にして其人ならんには遂に家運を恢にすべきや必せり。由是觀之、彼の生涯齷齪として金錢の奴隸となりて蓄財にのみ腐心しつゝある者の如きは、其何の心たるを解するに苦しまずんばあらざるなり。若し夫れ黄金の光輝く所廟堂の權貴も尙其頭を屈するを見て、金錢萬能を信する者あらば、以て與に語るに足らざるなり。假令金錢の力は如何に偉大なりとするも、それは畢竟拜金者流の皮想の觀察にして、金錢に依て人格を上下するに足らざるなり。痴人賊盜の輩も美装すれば猶立派に見ゆべし。意氣揚々として街路に馬車を驅り自動車を走らす者、若し其人にあらずして徒らに金持たるに過ぎざれば唯一笑に値するのみ。吾人は金錢以外に必ず尊むべきものあるを知らざるべからざるなり。

○才學も亦恃むに足らず

今や四民平等の社會にして、一般に門閥の制度は撤廢せられたり、故に才學ある者は何人も榮進して權勢を握り爵位を享受することを得べし。然れども才學は畢竟活動の道具進取の武器たるに過ぎずして人間其物の眞價値は別に存在せり。往年教科書事件の起るや、幾多知名の教育家官吏等は囹圄の人となれり。又日糖事件の起るや、社會の先達一國の選良を以て任ずる幾多の紳士を被告としたり。若し才學にして恃むべくんば焉んぞ不名譽なる鐵窓の人を出さんや。金錢尊からず才學も亦恃むに足らず、然らば何を以てか此社會に處せん。

○品性を尙ぶべし

古より孝子節婦は窮乏の家庭に現はる、吾人は往々垢塵に塗れ油に穢がれたる青服（職工）の仲間に感心すべき人物を見出すことあり、彼等は固より金錢に乏しく才學も亦多く之を有せず、然れども吾人が其天真の人格に打たるゝの時は、尊敬の念を禁ずる能はざるなり、是れ即ち品性の榮光なり。假令身に垢塵を附け襤褸を纏ふとも人をして崇高ならしむるものは即ち品性なり、尊むべきは爵位にあらず、金錢にあらず、財寶にあらずして、實に極善極美の品性なり。故に諸子が處世の大方針として先づ此品性の修養に努むべし、諸子にして品性なきの人とならば如何に俗界の功名を博するも以て尊むに足らざるなり。要之、品性は人間第一の寶なり。ローレンス曰く、「富よりも品性を取れ、假令全世界の富を得るとも汝が品性の總てを失はば何等の益あらんや」と。

○福澤翁の訓誡

福澤諭吉翁は諸子も知るゝが如く實利を重んじたる人なり、然れども翁は又品

性高潔なる大教育家なり、故に翁は實利を重んじながらも金銭の外に至寶あることを説けり。思ふに翁が實學を尊び實利を重んじたるは、當時封建の餘弊として「武士は食はねど高楊枝」と云ふが如き氣風ありて、金銭の勘定をも知らざるを以て却て名譽とし、爲めに國家を貧弱ならしめ、遂に世界の競争場裏に堪えざるに至るなきかを憂へたるものならんか。翁が金銭以外の寶に就て説ける所大に味ふべし、曰く

世に所謂錢一方の人にして錢の外に他志なしと稱する者にも、獨り自ら其身を省みて己が處世の得失如何を勘考し、世人の己れに對する交際法の厚薄如何を視るときは、何か物足らぬやうに思はれて、多少の遺憾あるは傍より推察して事實に違はざる可し。

と「何か物足らぬやうに思はれて」とは穿ちたる詞なり。世の貧乏人は一途に富限者たることを希へども、富者必ずしも心に満足するものにあらず、故に翁は右の所説に引續いて、世の所謂金満家が衣食を美にし邸宅を壯にし時に或は一擲千金の豪奢を逞うするは、獨り自己の快樂の爲めのみならずして何か物足らぬやうに思はるゝ其不満足を慰せんが爲めなることを説けり。翁は尙諄々として説て曰く

我輩の本願は尙一步を進め、天下の人をして全く錢を離れ無錢の邊に安心の點を定めて自ら名譽の大なるものあるを知らしめんと欲する者なり、即ち其安心の點は人生の智識徳義才力品行等の箇條にして、之を支配するに不羈獨立の氣概を以てするときは、發して處世の交際法と爲り、居家の快樂事となり、威武も恐るゝに足らず、富貴も羨むに足らず、心は天下最高の點に安んじて、身は熱界の俗塵に交はり（中略）、迫らず急がず悠悠々自ら居るときは、古歌に云ふ「色をも香をも知る人ぞ知る」の道理にて自ら世間の尊敬を博するや疑ある可からず。

と、眞に翁の本領たる獨立自尊主義を發揮して餘りあるの言と謂ふべし。翁は又智識徳義才力品行と併べ擧げたれども、品性徳行を以て最も大切なるものとする。ことは言外に自ら明かなり、所謂先哲欺かざるもの歟。

第五章 處世の覺悟 其二

○國家の保護

前章に於て吾人は聊か人として處世の立脚點を説明したり、本章に於ては即ち國民としての心懸を説かんと欲す。夫れ方今文明の世に於て吾人は一日も國家の保護なくして生を樂むことを得ざるなり。ロビンソン、クルソーの如く天涯の孤客として青空と碧海とのみなる無人の境に墜居すれば即ち止む。苟も社會の一員として人生共同生活の利益を享受せんと欲する者は、皆國家の保護の下に立たずんばあらざるなり。蓋文明の進歩と共に人類の生活は益々複雑となり、上古

蒙昧の蠻族が凡ゆる必需品を自ら給したるが如き簡易なる生活は、今日に於て之を營むに由なく、互に相倚り相扶けて以て生活することを得べきが故に、衣食住を始めとして、衛生の事醫療の事娛樂の事に至るまで、秩序ある國家の保護に依頼して初めて安んずることを得るものなり。吾人にして若し國家の保護を失はんか、嘗に日用の需要を充たすこと能はざるのみならず、忽ちにして種々の害惡危険に襲はるゝを免かれず、隨て一刻も高枕安眠することを得ざるに至らん。於是乎、吾人は國家の保護を重んずると共に、秩序ある國家の存在を維持する爲め、納税兵役等の義務を負擔するの理ある所以なり、保護に對して義務ありとは即ち是れなり。

○世界無比の國體

熟ら世界の歴史を按ずるに、一國にして或は君主國となり或は共和國となりた

るもの尠からず。又清國の如く太古より君主國たりしものと雖も、君位篡奪の革命は屢々行はれ、建國以來一姓相承けて君臨するものあるを見ず。獨り我國は神武天皇國を肇めてより以來、萬世一系の列聖相承け、皇統連綿として天壤と與に窮りなく、帝威赫赫々として日月と光を同うし、上皇室は億兆の宗家として百姓を慈しみ、下萬民は天皇の赤子として忠誠を致しつゝあり。是れ即ち我歴史の昭々として宇内に光輝を放つ所以にして、古今東西に比類なき國體の精華と謂はざるべからざるなり、法律は一國一地方の小習慣をすら重んじつゝあり、況んや二千五百有餘年に亙る光榮ある歴史に於てをや、吾人は縁もゆかりもなく忽然として此土に生れ出でたる者にあらざるなり、吾人は唯皇室の尊崇すべく國體の甚重んずべきを知るのみ。

○大に古史を講じて敬神の風を興すべし

日清戦役に依て日本は東洋の覇者となり、日露戦役に依て日本は世界強國の斑に列したり。此の二大戦役に依て日本人の熱烈なる愛國心と絶倫の勇氣とは遺憾なく中外に發揮せられ、我國情に通せざる歐米人の如きは、驚嘆の餘り之を天下の一大奇蹟となす者あるに至れり。成程彼等歐米人が視て以て奇蹟となし不可解となすは寧ろ當然の理由あるに似たり、何となれば今日我國の宗教は佛教といひ儒教といひ若くは耶蘇教といひ皆微々として振はず、殆んど人心を繋ぐに足るべき宗教なしと云ふも不可なき有様にして、立國の大本何處にあるやを疑はしむるものあり、而も此くの如き高尚なる犠牲的の信念を有するは一應理解し難き所なればなり。然れども吾人を以てすれば是れ何等の不可思議にあらず、我國には耶蘇教の「バイブル」、「マホメット」教の「コーラン」の如き教義的の經典は之を有せざれども、太古神代以來牢平として抜くべからざる國民的大精神あり、其源を天祖天照太神の瓊々杵尊に下し給ひし神勅に發し、此國は即ち神の國として一

Who was he?

天○萬○乘○の○列○聖○相○承○け○、○天○皇○を○君○父○と○し○皇○室○を○宗○家○と○し○て○天○壤○と○與○に○窮○り○な○き○を○立○國○の○大○本○と○す○る○も○の○な○り○「○我○國○は○即○ち○神○國○な○り○」○と○の○思○想○は○國○民○の○腦○裏○に○一○種○の○靈○妙○な○る○印○象○を○與○へ○、○茲○に○敬○神○の○心○を○生○じ○、○茲○に○忠○君○愛○國○の○念○を○發○し○たり○。○古○人○が○伊○勢○神○宮○を○拜○し○て

何事のおはしますか知らねどもかたじけなさに涙こぼる、

と歌ひしは、實に國民の真情を吐露したるものなり。故に古來我國に於ては祭祀を重んじ、上朝廷より下萬民に至るまで、神祇祖宗を祭り、殊に敬神の觀念に深きものあり、是れ一つの大なる宗教にあらずして何ぞや。

抑此精神は我國が四面環海の島國たる地理的關係より自然に鎔鑄陶冶せられたるものにして、既に三千年の久しきに亙りて我大和民族の間に磅礴し、儒教も之か爲めに同化せられ、佛教も此中に吸収せられ、藏しては渾然たる大和魂となり、發しては萬葉櫻の如き武士道となり、宗教以上の宗教として此國土と與に萬世無

窮に傳へらるべく、國民的に成立したるものなり。故に我國の神道には、初めより立教の聖人なる者なく、將た亦開宗の祖師なる者なし。夫れ祖師なく聖人なきが故に一定の教範なく亦經典なし。然れども吾人は我國に成文の經典なきを憂へず、唯此立國の大精神を辨せざる者なきやを憂ふ。天に二日なく地に二王なきは實に我國體の眞髓なり、然るに堂々たる史學の専門家にして此理に通せざる者あるが如きは、明治聖代の汚辱と謂はざるべからざるなり。畢竟するに彼等は禪讓放伐常ならざる他國の歴史に心酔して、世界無比の貴重なる我古代史の研究を忽にするものにして、當に昭々たる神明の靈に對して愧死すべきなり。若夫れ彼等にして殊更に新奇の説を爲し以て頑迷の徒に阿附したるものとすれば、最早學者としての立脚地を失ひたるのみならず、故意に大義名分を紊るの罪終に追るべからざるなり。於是乎、吾人は今日の青年諸子の間にも大に我古代史の智識を普及し依て神明を敬ひ皇室を尊崇するの風を盛にせんと欲する者なり、吾人は一篇の教

○立憲國民の本能を發揮せよ

憲法發布せられて我國は專制君主政體を改めて立憲君主政體としたる者なり、立憲制の本義は人民をして法律の制定に參與せしめ且豫算の審議を爲さしむるに在りて、此くの如くにして人民の權利を確保し其義務を限定し、以て專制の政なからしめんとす。故に立憲政治は現今に於ける最善の政體にして文明諸國の齊しく採用する所なり。帝國議會は即ち人民參政の府にして議員は即ち參政權を實行する重責を擔ふ者なり。故に議員選舉の權利は憲法上の權能として最も之を尊重すべく、彼の權勢利慾に左右せられて陋劣なる代議士を選出して怪しまざるが如きは、自ら大切なる國民の權利を放擲蹂躪するものにして、自己を害し國家を誤る者と謂はざるべからず、是れ立憲國民として切に注意を要する所なり。

第六章 目的の選擇

○舵なき舟、衝なき馬

吾人村蠻に學ぶの日、一日教師の奇問に接したることあり、曰く「諸子は生くるが爲めに食ふか、將た食らふが爲めに生くるか」と、是れ今日の滔々たる俗流に對して最も剴切なる詰問なり。今の世何ぞ子子たる小才子の多き、即ち何等の高尙なる目的もなく志望もなく、唯一日を安穩に衣食すれば即ち足るてふ徒輩の甚多きを觀る。彼等の生活は唯衣食の爲めにして目的の爲めにあらず、故に唯(上)長の命令を奉じて器械的に働くのみにして、其眼睛に何等希望の光の輝くを見ず、若し醒醒する所あらば即ち多くは阿堵物の爲めたるに過ぎざるなり。胡蝶の花を逐ふて舞ふは生きたが爲なり、「萍やきのふは東今日は西」とは古人の名句なり、乃ち彼等の生活は禽獸草木のそれと多く擇ぶ所なきを觀る。思ふに人の人

志を立てば、志立たざれば天下成るべし。今日百工技藝、雖も未だ志に基かざるものあらず、志立たざれば舵なきの舟、衝なきの馬の如し、漂騰奔逸何の底る所あらんや」と。人は再び生れ再び死することを得ず、豈漂々として舵なき舟、衝なき馬の如くなるべけんや。

○人世短きを憂へず

一日を送れば足る者は即ち一日の生命なり、彼等の生活は片々的にして毎日死して復新なる生命を繰回しつゝあるものなり。五十にして志を成し、餘は徒食して死する者は即ち五十歳の生命なり。死する迄志の爲めに働く者にして初めて眞に天壽を完うするものと謂ふべし。故に人として眞の生命は必ずしも肉體の壽命と一致せず、孔子は七十三歳にして其天壽を終りたれども孔子の志は尙

What is he?

今日に生くるものあり、釋迦も亦此くの如く、基督も亦此くの如し。我歴史のあらん限り昭々乎として仰ぐべきものは楠公誠忠の精神なり。近くは明治維新の原動力たりし者、藤田東湖、林子平、佐久間象山、雲井龍雄、吉田松陰の徒、昔振古未曾有の宏業を見るに至らずて死したれども、其精神氣魄は毅然として死後に生くるものありしなり。又彼の西史を繙いてアレキサンダー大王の偉業を追憶する者、誰か彼れの壽命が僅々三十三歳に過ぎざりしを驚かざるものあらんや。由是觀之、人生短きを憂へず唯其功なきを愧つべきなり。

○目的は宜しく遠大なるべし

古語に曰く、豹死留皮、人死留名と、吾人は須らく未來の希望に生きざるべからず、目前の小利に汲々たるべからず、而して其希望や又遠大ならざるべからず、貝原益軒翁の語に曰く

第六章 目的の選擇 人生短きを憂へず 目的は宜しく遠大なるべし

志を立てるは大にして高きを欲す。小にして低きを欲せず。小にして低くければ則ち小成に安んじ、大にして高ければ則ち大成を期す。凡そ事は上を學んで中に至り、中を學んで下に至るものなり、故に宜しく天下第一等の人たるを志すべし。とビーコンスフキールド伯は伯林會議の席上に英國を代表して豪雄ビスマークの高慢なる鼻を挫き、後英國の大宰相となりし英傑なり。彼れ曰く、「偉大なる思想を以て汝の精神を養へ、英雄たらんと欲するは即ち英雄のなるの階梯なり」と。古より英雄傑士、青雲の志を立て、名を竹帛に垂る者、皆初めより大志を抱かざる者なし。孔子は之が爲めに陳蔡の野に困憊したるにあらずや、日蓮は之が爲めに幾死生の間を出入したるにあらずや。家康も亦之が爲めに一生の大半を蟄伏したるにあらずや。大丈夫生きて封侯を得ずんば死して當に閻魔王と爲るべし」とは、實に白石其人の氣概を活躍せしめて餘あるの語なり、吾人豈小成に安んじて可ならんや。

○先づ自己の天分を知れ

目的の選擇は即ち一生の方針を定むるものなり、故に恰も處女の他に嫁せんとするが如く、疑議百出、一種の迷宮裡に入らざるを得ず、然れども是れ何人も一たび通過せざるべからざる關門なり。此時に當て若し其選擇を誤らんか、幾千金の學資と學窓に於ける幾年の星霜とは、悉く皆徒費徒勞に終ることなきを保せず。茲に醫師志望者に關する最近の實例あり、彼れは疾くより國手たらんことを希望し、某醫學專門學校の入學試験に應じて幸に學術試験を通過することを得たり、然るに何ぞ知らん最後の體格試験に於て色盲症なることを發見せられ、永く醫師たるの資格なき旨の宣告を與へられて、此處に多年の希望は水泡に歸したるのみならず、此時既に丁年以上に達して或る他の學校に對しては受験資格を喪失し、已むを得ず自己の最も意に満たざる方面に一身を投ずるの已むなきに至りたり。

其他虚榮の幻影に憧憬して一生の方針を謬りたるが如きは世に其例尠からず。エドマンド、バルク、文才識見を以て十八世紀の英國文壇に鳴る、然れども彼れが政治に熱狂して『美と自然』の外雄篇大作なきは、人の皆彼れの爲めに惜しむ所なり。マコーレー亦自ら其文才を認識して、英國史の外頻りに述作に力めたれども、屢次大官に任用せられて吏務に鞅掌し、彼のカーライルが、江湖に嘯傲して十二分に其天才を發揮したるに比すれば聊か遜色あるを免かれず。バルク、マコーレーの大才を以てして猶且其天才を専らにせざるの憾あり、尋常凡庸の人豈深く其天賦の能力を重んぜずして可ならんや。

目的を定むるに當ては先づ自己の體力と精神との双方面に亘て綿密なる考察を加ふることを要す。近視眼者にして航海者たらんと欲し、色盲者にして理化學を研究せんと欲し、矮小非力にして角力者たらんと欲するが如きは、即ち自己の體力を無視して一生の目的を定めんと欲する者なり。技工に拙にして技術者若くは

美術家たらんとするが如きも亦同様なり。次に精神の方面に於ては、或は想像に長じ、或は推理に長じ、或は辯論に長じ、或は事務に長する等、其人に依りて其長所を異にすること猶人面の互に異なるが如し、此等は皆各人天賦の資質にして所謂天分と稱すべきものなり。諸子は先づ自己の目的を選択するに當りて、靜に此天分を慮り、其體力の適ふ所、其才能の長する所、其嗜好の向ふ所に依りて、生涯の目的を定めざるべからず。諸子にして能く其長所を利用して之が修養を怠らざれば、容易に天賦の才幹技倆を發揮し、恰も順風に帆を揚げて河海を航するが如き趣あるべし。反之如何に其目的に忠實なるも、自己の天分を棄て、顧みざるときは、到底十分の成果を收むることを得ざるや明かなり。縦し亦多少の成功を博し得たりとするも、自ら疎外して顧みざりし本能の囁きは終生聞かざらんと欲するも能はず、其生涯は寧ろ慘憺たる失敗に陥りたるものと謂はざるべからず。目的の選擇は自己の爲めにして他人の爲めにあらず。故に飽くまで彼は彼なり。

第六章 目的の選擇 先づ自己の天分を知れ

我は我なりとの鞏固なる信念を以て、生涯の方針を決せざるべからざるなり。唯自家從來の職業は、其着手及成功の上に於て多大の便宜を有するものなるを以て其職業にして賤しむべきものにあらず、又自己に適するものなる以上、之を執らんことを考ふるは其當を得たるものと謂ふべし。

○次に時代の趨向を察すべし

吾人は今日の時勢の趨向に就て既に其大要を論じたり。諸子が目的の選擇を爲すに當りて此趨勢に注意すること最も肝要なり、時勢の推移と國家の現状とを究めずして漫然一生の目的を定むるは甚不利益なり。例へば昔時は孔孟を始め諸子百家の書を講ずるを以て唯一の學問となしたりしが、今は即ち然らず、社會に活用せらるべき實學を修むるを以て寧ろ急なりとす。一般に之を云へば、勞して效少き死學を修めんよりは、實社會に有用なる活學問を修むるを以て立身の捷徑と

す。社會は常に活眼にして活識を備へ、能く現代の時務を處理し得るの士を歡迎す。然れども自己の嗜好を棄て長所を措いて、濫りに時流に附和雷同するは亦失敗の原因なり。今日支那文學の攻究は昔時に比して著しく衰へたりと雖も、漢學に多大の趣味を有する者が電氣學若くは機械學を專攻せんとするが如きは必ず成功する所以にあらず、假令如何なる學術にても深く修養を積んで一家を成すに至らば、以て一世の瞻仰する所となるに足らん、是れ即ち一生の成功にあらずして何ぞや。抑時流を趨う者と時代の趨勢を察する者とは、其間霄壤月鼈の差別あることを知らざるべからず。前者は雷同的にして後者は創見的なり、創見的なるが故に時勢に先んずることあり、斯かる場合に於ては或は盲目なる社會の壓迫を蒙ることなしとせず。例へば飛行機の研究が今日の如く盛ならざる時代に於て、飛行機の將來を達見して全力を其研究に注ぐ者ありたりとせんか、恐くは代々木原頭の喝采の代りに社會の嘲笑惡罵を蒙りしやも知るべからず。軍人が百萬の敵を前に

して、毫も恐るゝ所なきが如く、學者が毅然として其所信を曲げざるの勇氣を必要とするは即ち此かる場合なり。幕末蘭學が漸く其萌芽を發したる時代に於て、渡邊華山、高野長英の徒が、或は慎機論或は夢物語等の著述に依りて、遂は筆禍を買ふに至りしが如きは即ち時流に先んじ時勢を洞見して以て學に殉したるものなり、時非なれば即ち己むを得ざるなり。唯其先見は空しからず遺勳永く後世に赫々たるものあるを以て彼等も亦瞑すべきなり。人は一代名は未代寧ろ死後の名の惜しむべきを知らば俗流の駄評の如きは眼中に置かずして可なり。

○架空の妄想に陥ること勿れ

目的は遠大なることを要すれども亦着實ならざるべからず、例へば火星との交通を夢想して之を自己の研究の對象とするが如きは、寧ろ狂愚の沙汰と謂はざるべからず。諸子にして萬一之に類する空想を抱く者あらば、速かに其希望を放棄すべし。空中樓閣は古人も戒しむる所なり、一生の目的は之を自己の天分を顧み

すべし。空中樓閣は古人も戒しむる所なり、一生の目的は之を自己の天分を顧み才力を計りて、其到達し得べき處に確立せざるべからず。王侯將相種なしと雖も何人も大臣たり大將たることを得べきにあらず、寧ろ自己の天分を守て或は醫師たり或は辯護士たり或は又農夫たり職工たるに如かざるなり。目的は職業に依りて高下あることなし、如何なる職業にても其業務の範疇に於て必ず高遠なる目標を見出すに難からず、此の目標にして一旦定まらんか何人も其志を奪ふこと能はざるものあらん、奪ふこと能はざるの志は必ず成るの日あり。此くの如く着實なる目的の中に遠大なる目標あり、二者決して相容れざるものにあらず、唯遠大なる目的と架空の妄想とは明かに之を區別せざるべからざるなり。

○刻苦勉勵の勇氣自ら勃興せん

吾人嘗て富嶽の登攀を試みたることあり。味爽六合目を發し七台目に至りて紫

雲紅光繪の如き御來光（富士山巔の日の出を云ふ）の壯觀を眺め、山頂を望んで登攀するに従ひ道は益々峻しく、漸くにして八合目に至りし頃は平生の健脚も意の如くならず、一行唯顔見合せて大息するのみなりしが、奮勃たる胸中の勇氣は毫も衰へず、唯一條の金剛杖を力に足踏縮めて最後の九合目を越え、胸突八町の難所もいつか登り盡して、遂に頂上一萬三千尺の上に立つに至ては、下界遙かに雲遠く身は眞に登仙羽化するの想ありたり。人生も亦此くの如し、一定の目的に向て猛進する者は如何なる逆境に處しても挫折することなく、一難を加ふる毎に益々勇氣の勃々たるものあるを見ん。遊惰徒食は目的なき者の事なり、困頓挫敗は目的の確立せざる者の事なり、目的にして一旦確立せんか、茲に確固不拔の勇猛心を生じ、如何なる世路の辛酸にも平然として之に耐へ、遂に最後の勝利を獲ずんば止まざるに至らん。古歌に曰く

末つるに海となるべき谷川もしばし木の葉の下くいるなり

と、光榮ある希望の海に向て進む者は先づ大に忍ばざるべからざるなり。

第七章 學校と實務

○學課に全力を竭すべし

古人の詩に曰く、百川東到海、何時復西歸、少壯不努力、老大乃傷悲と。思ふに人は珍異を珍異とし怪奇を怪奇として、而も眼前の平凡なる眞理を看過することあり。彼の彗星の中天に爛々たるを見て、此星、幾十年の後にあらざれば再び現はれず看落すべからずと云ひながら、此時、幾億萬年を経るも再び還り來らず徒費すべからずと云ふ者は甚だ尠し。ミルトン曰く、「時間は羽翼を有し忽ち飛び去りて歸り來ることなし」と、一生に一度の時間と思へば徒おろそかに費やすことを得ざるは謂ふまでもなきことなり、況んや人生朝露の如く明日をも必ずべからざるものあるに於てをや。吾人は前章に於て人の目的の遠大ならざるべからざらざるものあるに於てをや。

ることを説けり、然れども高遠なる目的は幾十年を経るか一生を費やすか或は數代に亙りて遂行せらるべきものにして、今日吾人の勉むべき所は卑近の事柄に外ならず、徒らに希望の光に憧憬して目前の事を怠るものは成功する所以にあらざるなり。目的は終局に在り、事業は眼前に在り、諸子は宜しく今日此の光陰を如何にして有益に送らんかを思考せざるべからず。故に諸子が學窓に在るの日に於ては、學生として日々の學課に全力を擧げて勵精すれば即ち足れり、是れ臆て諸子をして大業を成さしむるの道程なればなり。大業とは即ち小事の積集したる結果なり、紅海は細流を擇ばざるが故に深く、大山は土壤を讓らざるが故に高し、何事も先づ眼前の小事より着手せざるべからざるなり。

○勉學の秘訣

人は皆自己の領分あり、學窓に在ては時事は勿論成るべく世俗の事に頭腦を用

ゐざること第一に肝要なり。蓋機械に一定の馬力あるが如く人の精力にも亦一定の制限あり、精力の經濟は即ち精力の集中を意味し、精力の集中は即ち一方に秀つる所以なり。一學生あり、比較的僅少なる時間を勉強して而も常に一級の首席を他人に譲らず、彼れの勉強法なるものを聞くに、勉強中は全精神を書籍に集中して一切他念を容れざるに在るのみと、此くの如き勉強法は即ち書冊と同化する所以にして、其一時間の讀書は他人の一日の勉強にも相當すべし。藤田東湖翁撰む所の學則の首節に曰く

讀書は博きを貴び候得共、ウハスベリ致し候ては、何程萬卷を讀候とて用をなし兼候半哉、古人の所謂眼光紙背に透ると申す如く讀度事に御座候。

と、バックストンも又曰く

一書を読み了らざれば決して他書を読み起すべからず、一書読み了るといへども、書中の意義を悉く了解せざる間は決して他書を思ふべからず、且何事を學

ぶにも全幅の心力を用ふべし。

と。世には又頭腦遲鈍にして學校に於ける成績常に劣等なりし者が、落第に落第を重ねつゝありし間に、讀書百遍義自ら通ずにて自然に所修の學科に通じ、最後の好成績を擧げたる實例あり。此くの如きは勿論稀有の事例に屬すれども、自然に精力の集中を得たるものと謂はざるべからず。方今學生に取りて入學試験の容易ならざる事は既に之を説けり、然れども吾人の所謂精力集中法に依て勉學すれば、如何なる試験の關門も容易に之を開くことを得べきなり、要するに妄想邪念は學生第一の禁物なり、今日の新聞紙の如き放縱にして醜惡なる記事に富めるものは、學生の頭腦を混亂せしむる虞れあるを以て、寧ろ之を手をせざるに如かざるなり。

○學問は飽くまで必要なり

世には何等の學問なくして立身出世する者尠からず、然れども之を以て學問の不必要を唱ふる者あらば、それは大なる謬見なり。蓋今日生存競争の劇甚なる社會に立て、學問なくして相當の地歩を占むるには何等か天賦の才能なかるべからず、天賦の才能は學問に依て益々其光輝を發揮することあらんも、學問に依て其光を蔽はるゝことあるべからず。故に學問なくして成功する者は學問に依て益々其才識を磨くことを得べし、實際彼等は正式の學校教育こそ受けたることなからんも、天賦の敏才に由て社會的に多大の學問を修得しつゝあり、無學にして實は無學にあらざるなり。彼の安田大倉淺野等の諸富豪の如き單に牙籌の天才に依て鉅萬の富を成したる者在ても、其社會的に修得したる學問は必ずや多大なるものあらん。大隈伯は維新の壯士なり、伯は舊時代の教育を受けたることあらんも未だ嘗て海外に遊學したることなく、勿論亦我國の大學教育を受けたる人にあらず、然るに一日吾人が親しく伯に接して伯の所説を聞くに及んで、其の政治經濟歴史社

會等の各方面に互る智識が遙かに大學卒業生に超ゆるものあるに驚きたり。是れ確かに伯の天才が學窓以外に於て日進の學問を攝取したるの結果なり。天才者にして既に學問の必要あること此くの如し、況んや非凡の天才なき者に至ては枚々汲々たる講學に依て其智能を啓發し、以て初めて社會上の地歩を占むることを得べきなり。殊に方今日進月歩の社會に於て學問は益々其必要の度を増し、今日多少の學問ありと稱する者も明日は尋常一様の人となるの時代なきを保すべからず、勉めざるべからざるなり。

○學問は常識の涵養に缺くべからず

法工商農醫學の如き専門の學科は、或は法律家たり或は技術家たり或は醫師たらんとする者に向て各自の立脚地を見出すに必要な學問なるを以て、各々其専門の研究に委せて可なれども、語學數學を始めとして地理歴史物理化學動植物學

等の如き中學程度の普通學科は、何人も一と通り之を學修せざるべからざる普遍的の學問なり。此等の學問なき人は所謂常識に乏しく社會に立て何となく物足らぬ所あるを免かれず、常識とは學理的の専門の智識に對する語にして、普通一般の理解力ある人の有すべき程度の智識なり。而して此常識は人の思想行動を支配すべき根本的の智識にして、彼の常規を逸したる思想を抱き又は行動を爲す者は皆此常識に缺くる所あればなり、發狂者は即ち非常識の極端なる實例なり。常識なき者は又學者の講義を聞くも醫師の説明を聞くも、之を理解するの力に乏しきを以て、専門家との間に一つの鴻溝を造り、折角の名論卓説も之を用ゐるに所なからしめ、社會は爲めに調和を失し秩序を害するに至るべし。常識の修養は社會上此くの如くに必要なり。故に吾人は大に普通學の智識を擴充して、下女も下男も大工も左官も總ての階級を通じて、普通の學問を修めざる者なきに至らしめ、以て一般に健全なる常識を涵養し、智識の不具者を社會より一掃せんことを希望し

て已まざる者なり、況んや人生の精華たる青年學生諸子に於てをや。

○學校増設の必要

學問の必要既に此くの如し、何人も大に學ばざるべからず。然るに今日學生の進むべき高等の學校は其數甚少くして時勢の進連に伴はず、到底多大の入學志望者を收容すること能はざるを以て、嚴重なる入學試験の關門を設けて僅かに其一小部分を收容しつゝあり。是れ即ち少數學生の爲めに多數の學生を犠牲に供しつゝあるが如きものにして、人物經濟上默過すべからざる大問題なるのみならず之が爲めに遊食の徒を造り遂に邪道に踏入る者をも生ずべく、實に學制の一大缺點と謂はざるべからず。吾人は大に高等の學校を増設して、全國の中學卒業生中の志願者は一人も殘さず入學せしめ得るの程度に至らんことを希望して已まざるものなり。若し之が爲めに一般に智識の昂上を促がし、例へば彼の工夫職工の末

に至るまで専門的智識を備へざる者なきに至らば、是れ寧ろ國家の至幸なり。又今日は警察署長に大學卒業生を見るの世なり、一步進んで巡查に大學卒業生を見るの世とならば寧ろ國家の幸福にあらずして何ぞや。然れども國費多端の今日、政府の力を以て斯かる増設を企畫することは到底望むべからざる事ならん。於是乎吾人は全國富豪の力に依て、上は大學より下は各種の専門學校に至るまで、成るべく完全なる私立學校を設立し、以て時代の一大缺陷を補充するの外なしと信ず。政府も亦此かる計畫に對しては成るべく之を奨勵し助長して、彼の憐れむべき多數の青年學生を救濟するの必要あるべし、吾人は此點に於て官民協同の奮起を望まずんばあらざるなり。殊に既に論じたるが如く今日の學校教育なるものは生徒の人格教育につき甚冷淡にして、學校は學問の切賣所なりとの批難さへあり、隨て其卒業生も亦多くは鉛槧の備たるに過ぎず。此時に當て一世の儀表たるべき人を舉げて私立學校の主範となさば、天下翕然として之に趣き、依て以て時弊

を匡救するに足るものあらん。是れ即ち一舉兩得の方策にあらずして何ぞや。

○衆愚主義の教育

社會の半面には必ず一種の逆流あり、今日浮華輕佻の風一世に滔々たるものあれども、其反面には亦眞摯堅實の流なきにしもあらず。明治の代となりて漢學は時勢後れの學問として排斥せられ遂に漢字廢止論をさへ耳にするに至しが、近來は又漢學復興の形勢ありて漢籍の發刊せらるゝもの陸續として絶えざるもの、如く抑漢學は我國民的精神の涵養に與て最も力ありしものにして、且我國の文明と漢學とは離るべからざる關係を有する者なり。然るに我文教の局に當る者頻りに普通教育の學課程度を低下して、教科書に使用する漢字に制限を加へ、殊に漢學は之を普通教育の外に排斥せんとするもの、如し。此くの如きは果して國民教育の策を得たるものなるやは大に疑なき能はざるなり。加ふるに生徒の讀書力の

低下は諸般の學科に互りて其程度を低くするの已むを得ざるものあるに於てをや。要するに今日の教育方針は餘りに衆愚を本位とするの主義に陥り、爲めに國民的精神の涵養に至大の悪影響を及ぼしつゝあるもの、如し。而して今や漢學復興の舉を始めとして聊か之が反動の兆あるは吾人の大に欣快とする所なり。

○補習教育の必要

如何に勇猛なる將校ありとも戦争は大將一人にて爲すことを得ず、如何に熟練なる技術者ありとも工場は技師一人にて運轉することを得ず。戰場に多數の兵卒を必要とするが如く、工場には多數の職工を使用せざるべからず。而して工場職工は農家の子弟商家の番頭丁稚と同じく、平和の社會の兵卒として實地の活動者なり。彼等は實に學校の恩澤に浴すること少き者なれども、彼等を教育して彼等の智識を増進し、彼等の技能を上達せしむることは、方今百事改進の時代に於て

最も必要なり。是れ即ち農工商の各方面に亙りて補習教育の奨励せざるべからざる所以にして、近來我國が此點に於て長足の進歩を爲さんとしつゝあるは最も喜ぶべき現象なり。全國幾多の青年中には、一家の事情其他に依り到底十分の教育を受くるに由なき者あらん、吾人は此等の諸子の爲めに聊か補習教育の忽にすべからざることを一言するのみ。

○學問と實務

人事界と自然界とを問はず社會の現象は頗る錯綜たり、而も社會の現象は吾人の常に耳目にする所なり、故に實社會の仕事は一方に於て非常に複雑なるを俱に一方に於ては餘りに卑近なり。從て新に卒業證書を手にして社會の實務に當る者は學問と實務との調和につき疑を抱くとなきにあらず、然れども是れ學校に於ける單純なる頭腦を以て卒然として紛々たる社會に處すればなり、久しからずして

社會の何物たるを知らば豁然として頓悟する所のものあらん。翻て之を先輩者の言に聞くに、學校出の青年は實務に疎くして最初は調法ならざれども、歲月を経るに從て社會の實際にも通じ、遂に大に其才能を發揮するに至る、是に至ては丁稚上りの輩の到底及ぶ所にあらず。以て學問の効能が如何に發揮せらるゝかを知るに足らん。要之學問と實務との調和せざるが如きは唯皮想の觀たるに過ぎざるなり。故に諸子にして他日社會に立つに當ては、新に社會に生れ出でたるの覺悟を以て、先づ其智識學問を深く胸底に藏め、卑近なる事をも輕んぜず、意外なる事にも驚かず、必要に應じて其學識を活用するの遠慮あることを要す。諺に「能ある鷹は爪を隠くす」とは即ち是れなり。

第八章 職業の神聖

○職業は立身の堡壘なり

目的の選擇に就ての注意は既に之を論じたり、茲に之を約言すれば何人も自己の職業を決定するに當りては、第一に自己の嗜好長所、第二に社會の趨勢、第三に一家の職業、此等の各項につき十分の考慮と遂げ、然る後に初めて一生の大方針を定むべきなり。而して目的にして既に定まらんか、自己の生涯を託すべき職業も亦隨て確定すべし。是に於てか一旦定めたる目的は堅く之を守り、慎んで其針路を變更すべからず。維新の傑僧月照の歌に曰く

弓矢とる身にはあらねごと筋にたてし心の末はかはらじ

と、吾人は須らく此決心を以て目的の遂行に努力せざるべからざるなり。諸子が又社會に立つに當ては、自己の職業は其不愉快にして他人の職業は皆面白きもの如く感ずることあるべし。是れ一種の幻想なり、此かる幻想に驅られて職業を變換することあらば、新なる職業も亦存外に面白からざることを發見すべく、遂に彼れを試み此に着手して一生成すなきに終らざるは即ち幸なり。職業は立身の堡壘なり、如何なる不況に會し如何なる困難に遭遇するも之を固守するの勇氣なかるべからざるなり。

○職業の獨立と精神の獨立

職業に従事するに當りては大凡そ二様の針路あり。一は獨立の經營を爲す場合にして、一は他人に備はるゝ場合即ち使用人となる場合なり。獨立經營は愉快なれども困難なり。自己獨特の見識を以て事業を經營し一切他人の指揮干渉を受くることなく、隨て其成功は總て自己努力の報酬たるの感あるは即ち獨立經營の愉快なる所なり。計畫は適中せず資本は十分ならず其他種々雑多の故障を生じて意の

如くならざるは獨立經營の困難とする所なり。然れども熱心に當り百折撓まざれば即ち成功の彼岸に達するの日あるべきを以て、獨立經營の愉快は其苦難を償ふて餘りありと謂ふべし。然るに文明の進歩と俱に事業は益々大組織を以て經營せられ、小資本を以て獨立の計を爲すことは漸く困難ならんとするの勢あるを以て、父祖の業務を承繼する場合の外多くは使用人の生活を送らざるべからざるの趨勢なり。併し乍ら使用人には何等の獨立なしと思惟するは大なる謬想なり、彼の大員は國家の使用人なり、會社の社長銀行の頭取も亦一種の使用人なり、假令大臣たり社長たり頭取たらずとするも、福澤翁の所謂獨立自尊主義を以てすれば、他人の厄介とならずして自力自活する者は即ち獨立なり、社會には絶對の獨立なし、假令獨立の事業を經營するも顧客の意向には従はざるべからず、使用人として他人の指揮監督の下に勤務するも、精神の獨立乃至人格の獨立は害せらるべきにあらず、是れ即ち人間眞正の獨立なり。吾人は職業の獨立は強て之を希はざるも、精神の獨立は必ず之を失ふべからざることを一言せんと欲す。

○職業は皆神聖なり

社會は多衆の共同生活體なり、殊に文明の社會に於ては人類の生活は益々複雑となり、互に相倚り相扶けて人生共存の目的を達することを得べし。例へば社會は網なり、職業は網の目なり。網の目の一ヶ所にも破綻すれば網として其用を爲さざるが如く、職業の一種にても滅ぶれば社會全體に至大の影響を及ぼし、延て各人の生活を困難ならしむべし。今茲に一軒の米屋もなく一軒の味噌屋もなきに至らば、吾人は早速明日の食事に困難すべきこと勿論なり、其他豆腐屋酒屋呉服屋下駄屋の類を始めとして大工左官鍛冶工夫下女下男の末に至るまで、其一を缺かば吾人の生活は安全なるを得ず。由是觀之、職業に上下貴賤の別あれども、如何なる職業も皆社會に缺くべからず、即ち職業は神聖なり。故に吾人

は自己の職業は大に之を尊重すると共に、他人の職業をも亦尊重せざるべからず、近頃東京市内に下婢の拂底甚しく、爲めに初めて下婢にも犯し難き職掌あることを曉りし主婦ありと云ふが如きは、偶々以て職業の神聖なることを證據立つる一例なり。吾人は假令他人に使用せらるることあらんも、其執る所の職務には犯すべからざる神聖あり、此觀念ありて初めて職務を重んじ職務に勵精することを得べきなり。泰西の諺にも「職務の前には遠慮無用」と云ふことあり、味ふべきの語なり。

○官尊民卑の弊

職業は皆神聖なり、故に權貴も濫りに之を侵すべからず。昔時我封建の時代に在ては武士獨り權威を振ひ、商人百姓の如きは牛馬の如く之を遇したり。維新後に於ても尙此遺習を存し官尊民卑の風甚盛なりしが、今や民間の人も亦漸く重き

を爲し、官民相狹て國家社會の幸福を増進することに努力しつゝあり。然れども積年の弊風は容易に之を改むるに由なく、階級藩閥の思想は朝野に鬱積して、未だ官吏は一種特別の人間なるが如き迷想を脱却すること能はざるもの、如し、斯かる風潮は社會の進歩發達に甚有害なるを以て速かに之が矯正策を講せざるべからず。又彼の華族の制度の如きも今日は餘りに膨脹に過ぎたるの弊あり、我社會の組織上此かる制度の必要ありとするも成るべく之に制限を加へ、徒らに權貴を衍ひ閣下と號し御前と稱せらるゝを以て無上の光榮とするが如き徒輩は努めて之を少くし、舉國一致して此國の繁榮に努力せざるべからざるなり。要するに官尊民卑の遺風と俱に繁雜なる階級の制度は今日我國に特種の病弊なり。而して吾人は階級制度の創建者なる故伊藤公の傳記中に左の如き逸話を發見するを寧ろ意外とするものなり。即ち公の外遊中偶々大倉氏と同船し、下僚に向て戒しめたるの語に曰く、「吾人は國家の費用に依りて旅行しつゝあれども、彼れは自費を以て

漫遊しつゝあり、彼れが獨立の氣概は之を愛せざるべからず」と、嗚呼是れ吾人の所謂精神の獨立を讚嘆したるの語にあらずして何ぞや。

○趣味の人たれ

事業は成り難く生命には限りあり、吾人が一定の業務を執て世に立つに當ては、全力を擧げて奮闘努力すべきこと勿論なれども、一方に於ては又全く索寞たる無趣味の人たるべからず、何事にも總て趣味は音に其人の慰安たるのみならず、其風格を高尙優雅ならしむる所以なり。何等の趣味なく風流なく終日終夜碌々として金儲けの外に餘念なきの人は、兼好法師の所謂玉の卮の當なきが如く、何となく物足らぬ心地するものなり。趣味とは道樂の謂にあらず、趣味の爲めに本務を放擲して顧みざるが如きは即ち道樂なり。道樂は慎しむべし、趣味は耽溺すべからず。佐藤一齋先生曰く「春風以て人接し秋霜以て自ら肅しむ」と、即ち人と

して秋風落寞の觀あらんよりは春風駘蕩綽々として餘裕ある人たるべく、而も自ら修むる頗る嚴ならんことを希ふのみ。英佛の諸國に於て、或は政治家にして詩文に達する者あり、或は銀行業者にして動物學の大家たる者ありと云ふが如きは、何となく奥床しき心地するを覺ゆ。那翁は兵馬倥傯たる戰陣の間にもホーマーの詩集。プルタークの英雄傳等を始めとして常に龐大なる史書を携へたりと云ふ、彼れの一生の事業は單に戰爭のみならず法律制度の如きに至るまで其施設する所頗る宏大なり、是に於て誰れか彼れを以て餘裕綽々たる趣味の人にあらずとせんや。吾人は餘暇の許す限り、精力の許す限り、將た資力の許す限り津々たる趣味を養ひ、以て人生をして深奥なる意味あるものたらしめざるべからざるなり。

第九章 成功の本義

○不健全なる成功熱を排すべし

吾人は世の成功論に慨する者なり、一時盛に唱道せられたる成功熱も近來は死んと耳目に慣熟して稍其勢を失ひたるもの、如し、然れども成功宗は今も尙讀書社會に多數の信徒を有しつゝあり。吾人と雖も敢て成功を羨み不成功を喜ぶ者にあらず、唯世の成功鼓吹者が徒らに青年の血氣を煽動して不健全なる思想を注入し爲めに青年立脚の地歩を危うするとあらんを虞るのみ。抑世の成功論者の説く所を観るに、何が所謂成功なるやを説かずして唯社會に相當の地位を獲得したる者を以て成功者となし、其經歷を叙し、心懸けを説いて甚詳密なり、而して成功の手段としては常に勤勉を説き、忍耐を説き、先見を説き、果斷を説きつゝあり。勤勉忍耐等の諸徳を青年に鼓吹するは甚可なり、然れども如何なる事を成功と云

ひ如何なる人を成功者と云ふべきかを説明せざるは甚不可なり。若し單に富豪を以て成功者なりとすれば表面は兎も角裏面に於てはあらゆる不徳に依て其富を成したる者も成功者ならん、若し亦單に權勢ある者を以て成功者なりとせば忠臣義士時非にして不遇に終りたる者の如きは即ち不成功者となさざるを得ず。彼等成功論者の所説は往々にして此かる謬想を誘ふか或は少くとも青年の頭腦に一大混亂を惹起さしむるの虞れあり、此くの如きは即ち年少青衿を誤るものにあらずして何ぞや、是れ吾人が本章に於て成功の本義を明にせんと欲する所以なり。

○此くの如きは成功の途にあらず

古語に曰く、「遠人觀ニ物外之物、思ニ身後之身、寧受ニ一時之寂寞、勿レ取ニ萬古之凄凉」と。徒らに現世の名利に齷齪たる者は、當に身後の身を思はず、又萬古の凄凉を顧みざるのみならず、現世に於ても亦眞に幸福なることを得ざるなり。東京の何處

かに黒塗の門壁高く丈餘に及び、正面の鐵門は堅く鎖されて開きたることなく側
の耳門は身を屈めて漸く出入することを得べく、其狀恰も陰鬱なる地獄の牢門
を見るが如き構への一家あり。聞く此家の主人は夫の血涙なき高利貸にして、積
悪の復仇何時其身に至るやも知るべからざるを以て、自ら牢獄の如き邸宅を造り
て潜居しつゝあるものなりと。此くの如くにして幾萬の富を重ねるも何の幸ぞ
や。暴虐なる曩のサルタンは暗殺を恐れて臥床に安眠したることなく、室を變へ
部屋を移して深夜僅かに椅子に憑りて假睡するのみなりしと云ふ。此くの如くに
して一國の權柄を握るも何の幸ぞや。人は皆其形貌を見て真相を穿つことを得
ず、徳性を涵養せずして濫りに名利を趨う者は眞に成功する所以にあらざるなり。

○眞の成功は天の與ふる所なり

有徳の士にあらざれば眞正の成功者たることを得ず、中心に疚しき所ありて徒

に虚名を博し悪錢を積むも、以て成功者とするに足らず、些々たる名譽も微々た
る利益も俯仰天地に愧づることなくして之を得べくんば、是れ即ち一つの成功な
り。故に名譽も財産も皆天の與ふる所にして自ら進んで求むべきにあらず、處世
不ニ必邀功、無過便是功にして、天地の大道に則て自己の天分を盡し、依て以て
心身の満足を得れば即ち是れ成功なり。徒に權勢利慾を追逐する者は天の與ふる
を待たずして先づ自ら取る者なり、故に其心常に物慾に役せられて終生瞿々たる
ことを免れず、之に反して己れの徳性を涵養して權勢利慾の外に超然たる者は、
青空海濶、胸中一點の雲翳なく、名譽を博するも敢て衿らず、資財を積むも敢て
奢らず、悠悠として天地と俱に人生を樂しむことを得べし。此くの如きは即ち眞
正の成功者にして、於是乎般若心經に所謂「心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、
遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃」ことの境涯に入ることを得べく、切々として吾人
の渴仰して已まざる所なり。

此見地に立て古來幾多の人傑を觀察するに、米國の國祖たる華盛頓は實に模範的の大成功者なれども、那翁に至ては吾人の所謂眞の成功者にあらず。蓋フシントンが人道の爲めに自由の大旗を翻へし、百戰勳を奏して國家百年の大業を開き、功成り名遂げて馱畝の間に退隱したるは、天下萬世の瞻仰する所にして、實に福徳圓滿の大成功者と謂はざるべからず。ナポレオンに至ては畢竟するに一代の梟雄なり。彼れの目的とする所は人道にあらずして權勢なり、彼れは寧ろ人道の破壊者なり、故に伊太利の遠征より始まりてフーターールの大敗に至るまで、北征東伐、一日も靜座するに暇あらずして、而も社稷を泰山の安きに置く能はず、最後の決戰に一敗地に塗るゝに及んでは即ち再び起つに由なく、身は波濤萬里の外に流謫せられて大志空しく地に委し、人をして慘憺たる英雄の末路に一掬の涙を灑がしむ。吾人は彼れが精力の絶大なるを景慕すれども、其人格に至ては遠く華盛頓に及ばざるものあるを覺ゆ。要するに那翁は俗受けのする愉快なる英雄な

れども眞の成功者を以て目すべきにあらざるなり。

凡そ人の世に立つや、成敗は之を眼中に置かずして、飽くまでも最善の力を盡して其天分を完うするの覺悟あることを要す。彼の爵位勳章は情實縁故に依るも之を享受することを得べく、高位高官も亦一種の空名たるに過ぎず。此故に大人君子は天爵の獨り尊むべきを知て、人爵を視ること恰も弊履の如し。英國の諺にも "Nobility of soul is more honorable than nobility by birth" (精神の尊貴は家系の尊貴よりも名譽なり) と云ふことあり、福澤翁が、西洋文明の輸入者として多年人材教育の事に盡したるの功勞に依て、男爵を授けらるゝの議あるや、「福澤論吉は一個の平民を以て足れり」と唱へて之を辭したるが如きは、其心事の高潔なる流石に翁たるに恥ちすと謂ふべし。然るに超然として人爵の外に立つべき宗教家の如きが、百方奔走運動して僅に中流若くは下流の爵位を贏ち得たる。如きは寧ろ言ふに忍びざるなり。天地生々の徳人に享けて仁義となる、仁義なくして徒

らに人爵を飾るも、豈天恵に浴することを得んや。

第十章 最後の勝利

○社會は奮闘の舞臺なり

孔子曰く、不義而富且貴、於我如浮雲」と。芝蘭は深林に生ず而も人なきが爲めに芳しからずんばあらず、成敗は天に在り、君子は困窮の爲めに節を二三にすることなし、是れ顔淵が一簞の食一瓢の飲陋巷に在て尙其樂を改めざりし所以なり。夫の目的の爲めに手段を擇ばず、不正不義に依て權勢利慾を擅にするも、それは眞の成功にあらざることは前章に於て之を詳述したり。然れども盡すべき所を盡さずして徒らに天命を待て貧賤に安んずるが如き、或は狷介不羈世と容れず人と和せずして獨り自ら高うするが如きは共に甚不可なり。夫れ世路は崎嶇として人情の反覆は朝夕も亦測るべからず、殊に方今生存競争の激烈なる社會に

立て、進取向上の策なき者は即ち社會の劣敗者たることを免かれず。社會は奮闘の舞臺にして人は努力を以て生命とす、百折撓まず千挫屈せず、何處までも奮闘し何處までも努力し、以て最後の勝利を贏ち獲ずんば已まざるべきなり。孟子曰く、「命を知る者は巖墻の下に立たず」と、是れ人力の及ぶ限りを盡して然る後に天命を待つべしとの義なり。渴しても盜泉の水は飲むべからず、然れども或は貧賤を以て寧ろ得意となし、或は世を呪ひ人に遠かりて獨り自ら潔うするが如きは、社會の一員たるの資格なきものなり。此くの如きは即ち醉生夢死の徒、彼の鼯鼠にだも猶如かざるものと謂ふべし。

○意思の在る所乃ち道あり

凡そ如何なる小事にても少しく纏まりたる仕事は一舉手一投足にして乃ち成るものにあらず、況んや人間一生の目的とする所の事業を遂行するに當りては、豫

め幾多の障碍困難に出會すべきことを覺悟せざるべからず。成功と不成功との岐る所は即ち此の困難に打勝つべき力の強弱に歸す、故に奮闘力の強大なる者は成功し其薄弱なる者は失敗すべし。然らば奮闘力は如何にして之れを持続すべきか、之が爲めには強壯なる身體は素より必要なり、勤勉力行も必要なり、鋭敏なる注意力も必要なり、斷々たる勇氣も缺くべからず、不撓不屈の忍耐力も備へざるべからず、其他穩健着實なる精神、誠實なる義務の觀念、小成に安んぜざる向上心等、總て此等のものは缺くべからざる成功の要素なり。然れども成功の要件として最も肝要なるものは確固不拔の執着力即ち鞏固なる意思是れなり。意思にして鞏固ならんか、茲に勤勉力を生じ、勇氣を生じ、忍耐力を生じ、注意力をも亦生ずべし、是に於てか如何なる大事業も其成功を期することを得べきなり。諺に「精神一到何事か成らざらん」と云ひ、「斷して行へば鬼神も避く」と云ひ、又デスレリーが「成功の秘訣は志を堅うするに在り」と云ひしが如きは、能く此間

の消息に通ずるものと謂ふべし。古昔希臘のデモセテスは非常の訥辯家なりき、而も彼れが一旦發奮して雄辯家たらんことを期するや、或は急坂を攀ぢて胸廓を開き、或は澎湃たる怒濤に向て音聲を修練し、遂に今日に於てもデモセテスと云へば直ちに偉大なる雄辯家を聯想せしむるが如き大辯舌家となりたり。是れ即ち鞏固なる意思の發奮にあらずして何ぞや。近頃逝去したる大審院判事寺島直氏は篤學の老判官なり、氏が其職務上獨逸訴訟法研究の必要を曉るや、老齡六十歳にして初めて獨逸語の研究に志し、刻苦勉勵數年にして遂に斯學の原著を自由に涉獵するに至れりと云ふ。意思の在る所乃ち道あり。(Where is a will, there is a way)とは實に吾人を欺かざる金言と謂ふべし。畏れ多くも御製に
大空にそびえて見ゆる高根にも、のほらば登る道はありけり
とあるは、我等赤子を教へ給ふ大御心とこそ覺ゆれ。

○社會的制裁の必要

先登は勇者の能くする所、後殿は大勇の者にあらざれば能はず。凡そ社會の事進んで難關に當るは容易ならざれども、退いて己れを完うするは一層困難なり。是れ才子能者の往々にして中途に挫敗する所以にして最も誠しめざるべからず。悲觀論者は濫りに世の澆季を唱ふれども世は太古より淳美なるものにあらず、寧ろ千萬年の後には理想的の黄金世界も到來することあらんも、今日の人文の程度に於ては社會は未だ清濁混流しつゝあるものにして、所謂黃紙の三面記事なるべき材料は常に絶ゆることなかるべし。此渾沌たる社會に立て其終りを完くして最後の勝利を博せんには、進取的の勇氣よりも寧ろ消極的自衛の勇氣を必要とするものあり。即ち吾人はあらゆる社會の誘惑に打勝て一身を完うするの覺悟なかるべからず。此點に於て吾人は今日の社會に強力なる社會的制裁を必要とする

ものなり、社會的制裁と云ふも敢て暴力を用ゐるの謂にあらず、唯吾人の進路に障碍となるべき誘惑に對して、之を排斥するに足るべき數個の信條を作り、之を犯し之に背反せる者に德義的の制裁を加ふる事とするのみ。今や自由思想の發達と共に青年學生の生活にも殆んど何等の條規なく、制裁なく、彼等は唯僅に生來の良心に依て進退しつゝあり、故に意思の鞏固ならざる者は直ちに社會の誘惑に陥り、其多望なる將來の針路を誤る者尠からず、豈輕々看過すべけんや。茲に維新當時の武士氣質を窺ふに足るべき一話あり、左に摘記すべし。(三條公逸事談)

今の土方伯や南部男などが、京都に於て三條公の下に在て尊王の大義を唱へつゝあつた時互に盟約して、酒は英雄の資料として敢て辭するに及ばないが、苟も武士として婦女子を近づけるのは刀の手前此上もない恥辱であるのみならず、婦人に酌をさせて酒を飲むのは刀の穢れである。されば今後決して婦人を近づかず又婦人に酌をさせる事を嚴禁しやう、萬一此盟に違反する者があつたならば

屠腹して罪を謝する事にしやうと、堅く言交はしてあつた處が、南部男等はツイ酔心地に高樓置酒婦女子を侍らせて鯨飲したので、忽ち屠腹問題が勃發し、男は嫌が應でも割腹せねばならなくなつた時に、三條公の情けある仲裁で漸く無事に納まつた事があつた。

以て當時の青年武士の意氣を見るべく又其修養の如何に嚴格なりしかを窺知するに足らん。今日英獨諸國の青年間に於ても、人格の鍛練に就ては嚴重なる制裁を設けて互に相誡しめつゝあり、吾人豈獨り何等の用意なくして可ならんや。

○勝利は最後の五分間に在り

乾坤一擲、輸贏を此一戦に試みんとしたる關ヶ原の大活劇も、見事失敗に歸して、其黨與小西攝津と共に京師に囚はれたる者は即ち石田治部少輔なり。此時家康新しき小袖一領宛を贈りしに、行長は直ちに之を斥け、三成は受けて之を着用

したりと云ふ。又當時三成は腸を病みつゝありしが、近く刑場の露と化すべき身を以て養生手當怠らざりしと云ふ。之を以て三成を怯となすは即ち誤れり、偶々以て彼れの志の小ならざるものあるを窺ふべきなり。ミラボーは佛國革命時代の雄辯家なり、彼れ四十にして初めて名を成し、死する迄其政見の爲めに奮闘したり。東都柳原の羅紗商に塚原某なるものあり、彼れ五十にして初めて産を成し、畢生努力して遂に一と廉の資産家となることを得たり。非常の人には皆此くの如きの覺悟あり、事業は成り難く人生は老い易し、假令鬚髮霜を戴くも吾人の精力のあらん限り奮闘努力して止まざるべきなり。況んや此身壯健にして春秋に富み、成すべき幾多の仕事を其前途に有しつゝあるに於てをや。勝利は最後の五分間に在り、尋常一様の勉強は何人も之れを能くすべし、他人の竭力に對して猶一步を加ふるの覺悟あるにあらずんば、恐くは學校に於ても社會に於ても不合格者の列に洩るゝこと能はざらん、是れ即ち競争劇甚なる社會に於て最後の勝利を博すべき唯一の秘訣なり。

第二篇 精神の修養

第一章 自恃の精神

○獨立自恃は處世の第一義なり

人は生れ得て、双脚能く身を支ふることを得へし、是れ天の人に獨立自恃を教ふる默示なり。夫れ英雄は文王を待たずして興る、豈獨り英雄のみならんや、尋常の人亦獨立自恃の精神に依て、事功を樹つることを得べし。自ら立ち自ら恃むの精神にして、確立せざらんか、假令天賦の才能あるも、之を發揮するに由なく、蠢々として終生枯落を歎じ、貴重なる人生の意義を没却するもの比々皆然らざるはなし。故に古來聖賢の子弟を誡しむる者、必ずや精神の獨立、自恃の生涯を以て人間處世の第一義となす、是れ實に人生の出發點に於ける第一の根據なり。

此くの如く人生の第一歩に於て十分の覺悟ある者は、如何なる難境に處するも必ず自己の本領を發揮して其目的地に到達することを得へし。抑人の精神及身體には計るべからざる無限の潜勢力あり、一たび希望の光の心頭に閃くや、之を行るに慨然斃れて後已むの努力を以てすれば、如何なる至難の事業と雖も必ず之を成し遂ぐることを得べし、是れ即ち人心に宿る所の無限の潜勢力の發揮なり。彼の火災若くは水難等一朝非常の場合に於て、人が豫想外の力量を示すことあるが如きは、偶々以て人間の體軀に潜在する精力の如何に大なるかを示すものなり。大なる戦功も、大なる發明も、大なる文學も、將た亦各種の大なる事業も、畢竟皆此至大なる精力の發現たるのみ。而して此精力は自ら立ち自ら恃むの覺悟及努力に依つて初めて發揮することを得べきなり。自己の力を恃まずして濫りに他人の力を藉らんとする者は、自ら天賦の力を抛擲して顧みざるものにして、所謂天分を辱しむる者なり、徒らに他人の好意に狎る者なり、男子の恥を知らざる者

なり。此くの如くにして豈大業を成すことを得んや。

○鐵の如き意氣なかるべからず

人生行路の難關は既に之を論じたり、一たび失脚すれば身邊忽ち山時も瀾翻りて殆ど策の出づるなきを歎せしめんとす。加ふるに又各種の誘惑多くして花晨月夕動もすれば人をして小成に安せしめんとす。此間に立て獨立自恃の精神を完うするは、人生至難中の難事なり。

然らば如何にして獨立自恃の精神を完うすることを得べきか、剛健鐵の如き意氣ありて初めて之を能くすべし。昔博士ジョンソンの少時學窓に在るや、貧にして破靴を穿て平然たり、人あり之を憐んで新靴を與ふるの意あれども、彼れの傲岸到底尋常に受納せざるべきを思ひ、彼れの不在に乗じて新靴を其室に置きたり。然るに彼れの歸て之を發見するや、睥視良久之を久うして遂に其新靴を庭前に投

棄し、依然として破靴を足にして晏如たりしと云ふ。此意氣は實に彼れの一生を通じて一日も渝らざる所にして、後年代の文宗として世人の崇敬を受け、遂に十八世紀に於ける英國思想界の最高峰と仰がるゝに至りしもの、眞に由來する所ありと謂ふべし。吾人豈博士に學ぶ所なくして可ならんや。今や海に東郷大將あり、陸に乃木將軍あり、政治家としては又故伊藤公爵の如きあり、皆鐵の如き堅確なる意氣あり自信ありて、身を以て國家に許し、遂に能く世界的の盛名を博することを得たり。獨り思想界に於て此くの如き大意氣大理想の人を得ざるは、實に昭代の恨事なり、少壯血氣に富む者、宜しく其意氣を剛にし、其志望を大にして、獨立直往、以て此社會の切實なる要求に應ずる所なくして可ならんや。

○茲に感ずべき美譚あり

人生他人に頼るは易く自ら立つは難し、而して難きを避けて易くに就くは人情

の自然なり。然れども古來英傑の士は皆此易きを棄て、難きに趣きたるものなり。獅子の兒を産むや、先づ之を千仞の壑に墜して其力を試む、天の人に重任を下さんとするや、先づ百難を構へて之を凌がしむ。「艱難汝を玉にす」とは千古の金言なり。艱難辛苦に會して意氣忽ち阻喪するが如き者は、遂に大名を成すに足らざるなり。吾人の所謂獨立自恃の精神ありて初めて千難萬難を排することを得べし。茲に感すべき一の美譚あり。農學士芳賀龜太郎氏は芳賀式コーン、スターチ(澱粉)を發明したる人なり。氏の嘗て札幌農學校(今の農科大學)に學ぶや、家貧にして資給せず、具に苦學の辛酸を嘗む。偶々植村澄三郎氏(現大日本麥酒會社専務取締役)同地に在り、芳賀氏をして其志を成さしめんと欲し、日々英語の教授を受くる代りに芳賀氏の學資を贈ることせり。芳賀氏は此くの如くにして無事其學業を終ることを得たり。然るに芳賀氏が業成りて社會に職を得るや、直ちに馳せて植村氏を訪ひ、先づ多年の厚誼を謝し且自今月々曩に贈られたる學資

を返還せんことを以てす。植村氏は喜んで其成業を祝したれども、學資返還の一條に至ては固より其期する所にあらざるを以て堅く執て之を聽かず。是に於て芳賀氏は端然容を改めて曰く、「貴下の曩に資を給せられたるは全く貴下の好意に出でたることは余も亦之を解せり、然れども余は他人の好意に依りて學業を修めたりとの記憶を長へに腦裡に存するに堪へず、今余は既に一定の收入ある身分にして、則ち貴下の好意に酬ゆるの時機に到達せるものなり、語學の教授の如きは真に一舉手一投足の勞にして敢て言ふに足らず、請ふ余をして獨立自恃の人たるの名を成さしめられんことを」と。植村氏は此言を傾聽して大に其意氣に感じ、直ちに其言を容れて芳賀氏の返還を受くる事とし、之を他の貧書生に給して芳賀氏の志を成さしめたりと云ふ。芳賀氏といひ、植村氏といひ、公明正大の意氣、眞に他力主義の軟骨漢を愧死せしむるに足るものあり、吾人は實に此くの如き美譚を聞いて、之を本著の活きたる材料とすることを得たるを喜ぶものなり。

○社會は斯かる腐腸漢を葬るべし

世に駙馬と稱せらるゝ者あり、妻女の夤縁に由て權門勢家に近き其餘惠に依て僅に志の幾分を成し、以て昂然として往日の儕輩に誇らんとす。此くの如きは即ち獨立自恃の精神を没却したるものにして、其心事の陋劣卑屈なる真に嗤笑に堪へたる者と謂ふべし。進んで人生の難局に投ずること能はざるは勇なきなり、他人の力を藉りて榮達を圖らんとするは意氣なきなり、閨閥に連りて功業を成さんとするは恥なきなり。而も今日此くの如き徒輩が往々社會の上位を占めて成功者を以て自任し、後進者亦之に倣ふを成功の要訣と思惟するが如きに至ては、天下士道の頹廢も亦極れりと謂ふべし。吾人は斯かる腐腸漢を社會の外に葬らんと欲する者なり。

權門勢家も子女あれば之を人に嫁せざるべからず、故に權門勢家の子女を納れて之を妻女となす者亦無かるべからざる道理なり。然れども此の如きは男子として進で求むべきの事にあらず、若し已むを得ずして權門に連縁せざるべからざる境遇に陥らば、宜しく斷乎して權門の力に依らずして別に立身の途を開拓するの決心なかるべからず、否らざれば即ち吾人の所謂軟骨腐腹漢たるに終らん、思はざる可からざるなり。又斯かる境遇に陥りたる者は、如何に獨立自恃の手段に依りて立身するも、其榮達は一に皆舅家の援引に因るもの、如く解せられ、隨て終生社會に重んぜられざることを覺悟せざるべからず。男兒豈求めて此くの如き運命に陥るべけんや。

夫れ天の人に才能を賦與する所以のものは、各々之を發揮して社會に貢獻する所あらしめんが爲めなり。故に一藝一能も亦深く天意の存するものあり。然るに此天賦の才能を暴殄して濫りに他人の力に依頼せんと欲するが如きは、抑天意に悖るの甚しきものなり、此くの如くにして豈真正の幸福を享受することを得んや。

他人の力を藉ることなくして、自ら信ずる所を行ひ、自ら信ずるに所に趣かば、胸中自ら言ひしれざる満足を覺ゆべし。成敗利鈍は天に在り、人は唯事に當て自己最善の力を盡すべきのみ。街路に於ける蜺屋の賣り聲、停留場に於ける新聞賣子の叫びの如きは、皆是れ獨立奮闘の叫聲なり。人生の至樂は糸にあらず竹にあらず、將た花にあらず月にあらずして、實に此獨立自恃の生活に在り、好んで他人に依頼せんと欲する者は自ら人生の眞意義を滅却するものと謂ふべし。況んや婦女子の縁故に依て聞達を求めんと欲する者の如きに於てをや。社會は擧て斯かる腐腹漢を葬り去らざるべからざるなり。

第二章 意思の鍛鍊

○意思の強弱は成敗の岐るゝ所なり

人苟も生を天地の間に享く、焉んぞ無爲にして一生を終るべけんや、必ずや

身を立て家を興して其存在を社會に印するの覺悟なかるべからざるなり。即ち或は智力に依り、或は勞役に依り、或は手工技藝に依り、或は此等の總てに依て社會に活動し、人生をして無意義のものたらしめざるの用意を必要とす。而して之が爲めには先づ獨立自恃の精神を確立して紛々たる俗流の間に勇往邁進せざるべからず。然れども決心は甚容易にして實行は常に困難なり。假令當初は他人の力を藉らず獨立して奮闘するの覺悟をなすも、中途種々の困難に遭遇すれば、忽ち挫敗困頓せざる者甚尠し、於是乎、百折撓まず千挫屈せざる鞏固なる意思を必要とする所以なり。意思は即ち事を成すの基礎にして、才能技藝の如きは寧ろ枝葉なり。如何に秀拔なる才學あるも、如何に熟練なる技能あるも、人の本體たるべき意思にして薄弱ならんか、才學技能は寧ろ無用の長物たるに終らんのみ。故に世に處して最も肝要なるは意思の鍛鍊なり、西哲バクストン氏の言に曰く。

人一たび志を立つ死か若くは勝利あるのみ。此心懸を以てすれば此世に於て成

し得べき事は必ず之を成就するに足れり。然れども此心懸を失はんか、才能も境遇も將た亦機會も、二脚の動物をして眞に人たらしむる事能はざるべし。

“A purpose once formed, and then death or Victory! That quality will do anything that can be done in this world; and no talents, no circumstances, no opportunities, will make a two-legged creature a man without it.”

一讀三誦、此間に無限の教訓を含蓄せるを覺ゆ。成功も失敗も結局は即ち意思の鍛練如何に在り、思はざるべけんや。

○意思薄弱なれば百弊之に乗す

身體は之を父母に享けて幸に無病息災ならんか、人間處世の第一要件は即ち完備せるものなり。而も此強壯なる身體を捧げて奮闘すべき確乎たる心なく、泛々として心波情海風向の儘に蜉蝣の生涯を送らんとする者の如きに至ては、百弊忽ち其虚に乗じて身邊に蝟集し來り、煩悶懊惱の極遂に身體の健康をも傷ぶり、一生を不快苦惱の裡に送るもの比々として皆然らざるはなし。近時青年の意氣頻りに衰耗し、柔懦放逸以て風をなし、内に不拔の信念なく、外社會の狂瀾怒濤に翻弄せられて、忽ちにして不熟なる厭世觀を發し、或者は一轉して險惡なる思想に襲はれ、或者は人生を誤解して華嚴の飛瀑若くは淺間の火口に投する等、一身を誤り一家を亡ぼし延て社會を荼毒するに至る、豈戒しめざるべけんや。

吾人の知れる醫師の實驗する所に據るに、近來神經衰弱症は青年の間に猛烈なる勢を以て流行し、青年患者中の過半は此病に犯されつゝありと云ふ。而して神經衰弱症は即ち多くは煩悶病に屬せり。以て如何に今日の青年が世に處して煩悶しつゝあるかを窺ふに足らん。吾人は此くの如き事實に徴して、之を國家社會の一大問題とするを躊躇せざる者なり。既に屢々論じたるが如く、青年は第二の國民なり、社會の後繼者なり、此第二の國民たり後繼者たる者が、不健全な

思想に襲はれつゝありとすれば、是れ即ち社會上由々敷重大問題にあらずして何ぞや。而して煩悶懊惱は即ち意思の鞏固ならざるに原由するものなるを知らば、意思の鍛練は即ち時弊を匡救する所以なり。吾人は邦家の前途を思ひ大に戒慎する所なかるべからざるなり。

○如何にして意思を鍛練すべきか

人間萬事塞翁が馬、行路難は人間處世上當然の事なり。行路難なるが故に成功者を謳歌するの意義初めて存す、若し何事も意の如くなることを得ば、世は沈衰して深大なる意義を失ひ、人は皆醉生夢死して蟻虻にだも如かざるに至らん。由是觀之、奮闘は即ち吾人の生命にして、千難萬苦を排除するは即ち吾人の任務なり。吾人先づ此覺悟を以て意思を鍛練し、此信念を以て社會に處せざるべからざるなり。

青年は處世戦争の進備期なり、故に此時期に於て意思を鍛練し人格を修養して、來るべき時期に奮闘劇闘するの準備を造らざるべからず。一旦進んで社會の公人となるに及んでは、百難千障踵を接して到り、之が應接さへも容易ならざるべし。米國大統領タフト氏が曩年其母校たるエール大學に臨んで諸生を警醒したる語に曰く、「顧みるに生れて最も愉快を感じるは學窓に在るの時代なり、而も一旦校門を出で、實社會に臨まんか、忽ちにして種々の不平不満を生ずべし、此時に當て一身を完うするの途は、自己の分に安んじて四圍の事情と推移するに在り」と。若しルーズヴェルト氏をして言はしむれば、必ずや最後の一句は「此時に當て一身を完うするの途は、不撓不屈の鞏固なる意思を以て飽まで奮闘するに在り」と訂正されん。是れタフト氏とルーズヴェルト氏との人格の相違なり。要するに青年時代に於て意思の鍛練を十分にせざれば、他日社會に處して大に爲すあるに足らざるなり。故に此時代に於て種々の逆境に處して、自然に意思の鍛練をなすの

機會に遭遇したる者は寧ろ幸福なり。遠大の志ある者は、寧ろ不遇を喜んで此間に處世の眞味を了得するの用意あるを要す。

此くの如く不遇艱難は自己を試むる機會なりとの觀念を以て勇往邁進すれば、意思は自ら鍛鍊せられ、何事も樂觀しつゝ、笑て世事に當ることを得べし。是れ意思を鞏固にする唯一の覺悟にして、同時に亦萬事に成功する所以なり。古歌にも

此上になほ憂き事の積れかし、かぎりある身の力試めさん

と云ひ、又西諺にも「逆運の利用も亦樂しからずや」(Sweet are the uses of adversity)と云ふことあり。大丈夫平生の心事正に此くの如くならざるべからざるなり。

○青年時代の障害

公人として世に處するの困難に比すれば、青年時代の障害の如きは殆んど言ふに足らざるなり。青年には複雑なる社會と交渉するの繁なく、又一家を支持するの責任ある者少し。青年の障害と云へば、貧にして學資の給せざるか病弱にして勉學に堪ざるか、或は一家の事情と自己の志望と相一致せざるか等なり。自己一生の目的の選擇に就ては既に之を詳論したり、此目的と一家の事情との調和に至ては一概に茲に論ずることを得ず、要は唯大局に鑑みて事を斷すべきあるのみ。若し夫れ脆弱事に堪へざるに至ては、天賦の薄運之を如何ともすべからず、然れども意氣旺盛なれば少くとも病魔をして其威を逞うせしめざることを得べし、是れ吾人の日常實見する所なり。

學業に志ありて學資の給せざる者は世に其例尠からず、志は遠きに在りて資は給せず、其心事同情するに堪へたりと雖も、此くの如き障害は寧ろ青年の意氣智力を驗すべき試金石なり。青年血氣の身を以て志だにあらば、課業の餘暇

數時間の努力は優に自ら給するの資を得るに難からず。他人の睡臥し遊戯する時間を利用して奮闘努力するは寧ろ人生の快事にあらずや。學資不給と云ふが如き小障害に辟易して其志業を果さざる者の如きは、奮闘の氣力なきものにして、他日社會の一員として立つ場合に當ても、到底天下有用の材たることを得ざるや明かなり。

其他青年勉學の障害として兵役の義務を數ふる者あれども、在學中は多く徴兵猶豫の恩典あるのみならず、萬一兵役に就くも是れ國民奉公の義務にして實ろ一身一家の榮譽なり。而して人間一生の事業に對して僅々二三年の服役は、眞に短日月たるのみならず、此間に體力を強健にし、精神を活潑にし、奮闘努力の活ける教訓を受け、兼て義勇奉公の信念を涵養する等、其享くる所の利益は失ふ所を償ふて餘りあり。故に兵役の如きは之を障害として數ふるに足らざるなり。

要之、青年時代の諸障害は人生奮闘史の第一頁たるに過ぎずして、之が爲

めに挫敗する者の如きは、到底社會に立つも成功することを得ざるべし。不遇逆運は寧ろ青年の意思を鍛鍊すべき好機會なり、諸子は方に一難を経る毎に勇氣益々加はるの意氣なかるべからざるなり。

○暴虎馮河の勇は之を慎しむべし

上來吾人は不撓不屈の精神が事を成すに最も必要なることを説述したり。然れども勇氣は虎狼も猶之を有す、人の禽獸と異なる所のものは、主として其智力に在り。猪突猛進は事を破る所以にして決して功を收むるの途にあらず、獨立自恃の精神も、不撓不屈の氣力も皆絶對的のものにあらず。元來社會は共同生活の團體にして、甲乙互に相倚り相扶けて各自の生活を完うすることを得べし、孤影然、全く獨立孤居して事を成さんとするも得べからず。依るべくして他人の力を籍るも、男子として恥つべき事にあらず、又己むを得ざる場合に退嬰蟄伏する

は、實る他日の雄飛を期する所以なり。唯吾人は天賦の心力及體力を無視して濫りに失望落膽し、若くは憐を他に乞ふの不可なるを戒しむるのみ。暴虎馮河は因より吾人の與みする所にあらず。

第三章 向上の精神

○向上の精神なき者には進境なし

吾人は既に人の目的の遠大ならざるべからざることを論したり。遠大なる目的の在る所即ち向上の精神あり。向上の精神は例へば直立せるが如き急坂に懸かる一條の鐵鎖の如し、人は此鐵鎖に依りて歩一步頂上に近づくことを得べし。此の如く鐵鎖は以て人を山巔に導くべく、向上の精神は以て人を成功の域に導くべし。向上の精神を缺く者は進境なきの人なり、古より大業を成す者其常人と異なる所は、主として向上發展の意氣甚盛なるの點に在り。秀吉が身を微賤に起し

て人臣の極位に昇り、終に兵を鷄林に動かして明國を窺はんとするに至りしが如き、ペートル大帝が身を船匠の群に投じ、自ら文明の輸入者となりて露西亞大帝國の基礎を築き、其世を終るまで覇業の宏恢を策して倦まざりしが如きは、悉く皆英雄の胸中に鬱勃たる向上心の發現にあらざるはなし。然れども吾人は萬人に英雄を期し大業を成さんことを望むものにあらず。假令尋常一様の事業にても之を完うして、社會の一員たる本分を盡さんには、向上の精神は一日も之を缺くべからず、彼の徒らに安を偷んで小成に甘んずる者の如きは。遂に生存競争場裡の落伍者たることを免かるべからざるなり。

○鞏固なる意思と向上の精神

如何に向上發展の精神あるも之を實行するに鞏固なる意思なければ、以て事業を成就することを得ず。向上の精神と鞏固なる意思とは、事を成すに相俟て離る

べからざる關係を有するものなり。「人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し」とは家康の家訓なり。遠き道を行かんとするには向上の精神を必要とし、途中幾多の困難を凌ぐには鞏固なる意思を缺くべからず。此精神あり氣魄ありて初めて萬事成すべきなり。

●●●●●
ナポレオン二十五歳にして將官となり伊太利遠征の途に上らんとするや、道を瑞西國境に取りて一擧アルプスの嶮を踏えんとす、人其嶮難軍を行るの甚無謀の擧たるを諫むるや、彼れ直ちに豪語して曰く、「天下豈我を妨ぐるのアルプスあらんや」と。遂に非常の困難を冒して歐洲無比の峻嶺を踏破し、以て遠征の目的を達することを得たり。此向上的精神と此鞏固なる意思とは彼れの生涯を一貫して大業を成さしめたる所以にして、吾人の努めて彼れに學ぶべき所なり。

●●●●●
人生成功の月桂冠は此くの如き用意ありて初めて之を戴くことを得べし。ナポレオンのアルプス越には、懸崖雪路に幾多の武器及兵士を損したりしが、一旦伊太利平野の渺茫として其前路に開くを見るや、流石深沈寡黙なる英雄も喜色滿面蔽ふ能はざりしものありしと云ふ。人生行路の多端なる、幾嶮山を踰ゆるにも比すべし。時に峻坂を攀づくべく、時に蒙茸を披くべく、其困難は擧げて數ふるに遑あらず。然れども其行程には歩一步必ず進境あり。臆て山巔に達して群峰脚底に低く、身は揚々として白雲の上に嘯嗽するの快あるべく、こは即ち非常の勞力に對する報酬に外ならず、大なる樂は必ず大なる辛苦に生るゝことを知らざるべからざるなり。

○現代に於ける活きたる教訓

現代に於て向上の精神を以て奮闘的生活を續けつゝある活きたる教訓は、之を米國前大統領 ルーズヴェルト氏に見ることを得べし。氏が青年學生時代に於て如何に向上發展の意氣に富みたるかは、最初羸弱なりし身體を鍛練して無比の強健

なるものとなしたるにても之を想見することを得べし。而して一たび學窓を出でて公人生活の舞臺に立つや、其意氣の剛健にして一日も向上の精神を失はざること天下に多く匹儔する者あるを見ず。即ち最初二十四歳にして紐育州會議員となりてより、遂に大統領の榮位に昇りて天下の第一人となるまでの間、州會に於ては正義を楯とし侃々諤々の議を唱へて忽ちにして其頭角を現はし、次て紐育市の警察長官としては快刀亂麻を斷つ、勢を以て官海の腐敗紊亂を匡正し、幾何もなくして紐育州知事となり、海軍次官となり、副統領となりて、マツキンレー氏の不時の最後は圖らずも彼れに大統領の冠を載かしむるに至れり。其間米西戦争の起るや海軍次官の重職を辭して驃騎隊を組織し、自ら其隊長となりて彈丸雨飛の間に致馬征伐の功を奏したるが如き、或は僅小の時日にも劇務の閑を得れば、乃ち西部地方の大平原を跋涉して猛獸狩獵の壯舉を試みたるが如き、何れも皆彼れが向上の精神と奮闘的意氣の旺盛なるものあるを示さざるはなし、而して曩に大

統領の職を退くや、亞非利加大陸に猛獸狩の大計畫を遂行し、今や潜龍再び雲霧を窺ひつゝあるが如き態あることは、皆人の知悉する所なり。要するに吾人は氏に於て奮闘的生活の活模範を得つゝあることは、深く之を感謝せざるべからざるなり。彼の所謂屬僚刀筆の地位を得れば傲然として舊誼の儕輩を凌侮せんとする者の如き、或は大臣よりは富豪となれば意揚り氣満ちて高樓臺榭に安逸を貪らんとする者の如きは、氏の行動に鑑みて正に愧死すべきなり。

○獸類にも此くの如き向上發展あり

濠洲の一孤島に奇なる野兔の棲息するあり、其奇なるは即ち彼等が四肢の爪にして、爪端銳利刀の如くに彎曲し、宛然豺狼鷲鳥の爪の如きものあり。而して多くの兎族中獨り彼等のみ此くの如く銳利なる爪を有するに至りしものは抑々亦謂れあり。嘗て同島に一地を劃して蔬菜を植付けたる者あり、一日野兔の群襲來し

て植うる所の蔬菜を荒し去りたるを見をや、彼は其畠地に繞らすに嚴重なる柵を以てし、兎群をして其柵内に入ること能はざらしめたり。是に於て兎族は如何にもして此柵内に躍り入らんとし、日夜其鈍爪を磨いて柵に攀ち、遂に何時しか其爪は猛鷲の如く鋭利なるものと化し、容易に柵内に闖入して其口腹を充たすことを得たり。爾後此兎族の間に生る、仔兎は、自然に鋭利なる爪を有し、動物學上茲に異様なる新例を發見するに至りしものなりと謂ふ。

區々たる兎族にして尙此くの如し、移して以て人間處世上の好鑑戒となすことを得べきなり。

第四章 着實の思想

○空中樓閣は失敗の原因なり

自動車走り汽車電車の馳する世の中に於て、人の心も亦自ら輕佻浮薄なるこ

とを免かれず。昔仙臺の志士林子平は下駄を穿て江戸仙臺間九十里の道程を數日の間に往復したりと云ふ。今日交通機關の發達したる社會に於て、百里の道程を徒歩するが如きは、誠に迂愚なるが如きの觀あれども、着實穩健の思想は自ら其間に涵養せられたるものなる事を忘るべからず。古人の何となく泰然として落付きて見へ、今人の何となく漂々として吹かば飛はんが如くに見ゆるは、蓋所謂臍下丹田の工夫の有無に基因せずんばならず。

此くの如く今人は甚輕佻にして隨て着實の思想に缺乏せり。動もすれば空中樓閣を畫いて、粒々辛苦の筆法に足らざるものあり。英語に“step by step”と云ふ詞あり、千里の道も一步よりす、社會に處しては必ず歩一步に進むの覺悟なかるべからず、磊落不羈は英雄に於ても亦缺點なり、家康の着實穩健は徳川三百年の霸業を關きたる所以にして、秀吉の磊々落落は二世にして忽ち没落の不幸を招きたる所以なり。吾人が秀吉の豪快を喜び家康の老獪を惡むが如きは是れ自ら別

問題なり。殊に今日の進歩したる社會に於て、着實の思想なき者は到底失敗者たることを免かれざるなり。

○信用は重んずへく投機は慎むべし

善惡賢愚相錯るは社會の常態なり、古より人生は善美なるものにあらず、殊に社會の進歩するに隨ひ、孰れか善孰れか惡、孰れか賢孰れか愚なるやを識別すること益々困難なり。故に吾人が此渾沌たる社會に處して確乎たる信用を繋ぎ得んには、最も着實穩健の美風を養はざるべからず。信用は實に人生立脚の基本なり、如何に才識煥發するものあるも、如何に辯舌人を魅するものあるも、其人にして着實の思想を缺き、隨て信用の置くべからざるものあらば、次第に人の敬遠疎隔する所となり、遂に全く社會上の地歩を失はずんば即ち幸なり。

此かる見地に於て吾人は投機事業に依て一攫千金を夢むる者の如きは、極力

之を排斥せんと欲す。彼の兜町若くは彌敷町邊に奔走しつゝある者を觀るに、遽々然として眼光常に定らず、足を空にして東西に馳せ違ひつゝある様、如何にも不安の態を示しつゝあり。彼等は金錢を天空より舞ひ落つるもの、如くに考へ、四六時中唯好機會を捉ふることに焦慮しつゝあるを以て、一瞬も心を安んずる暇なく、夜も亦安臥熟睡すること能はざる者多しと云ふ。故に彼等の仲間には發狂者若くは自殺者を出すは内外俱に珍しからざる事例にして、不定不安の基礎の上に立つ者の當然受くべき運命と謂はざるべからず。要するに眞の成功は着實なる努力の賜物なり、投機的の事業は總て賭博と同じく人の信用及品格を傷くる所以にして、結局失敗を招くの原因なることを曉らざるべからず。

○成功者に對する世人の謬想

官海に於ては大臣となり、財界に於ては富豪と稱せられ、其他民間に在て一流

第四章 着實の思想

信用は重んずへく投機は慎むべし
成功者に對する世人の謬想

の人物と稱せらるゝ者の如きは、皆世に所謂成功者なり。而して世人の此等成功者を見る、唯現在の赫々たる地位名望に眩惑せられて、徒らに彼等を以て幸運の寵兒となし、甚しきは「法螺の吹き當て」若くは「山師の成り上り」となして、毫も彼等が今日の成功を博するに至りし道途の真相を捕捉し得ざるもの、如し。古來社會に立て成功する者は、要するに自己の身邊に湧起し來る所のあらゆる機會を捉へて、熱心事に當りたるの結果に外ならず。所謂法螺又は山師を以て眞の成功を贏ち得べきものにあらず。成功は皆苦心慘憺の結果なり。世に完全無缺の人あることなし、如何なる成功者も何等か多少の缺點なきことを得ず、殊に喬木風多き理にして、成功者にして紛々鬱々たる世評の矢面に立つ者尠からず。然れども吾人は其缺點の如きは措いて之を問はず、唯其長所を見て吾人の取て範とすべき所を看過せざれば即ち可なり。若し夫れ成功者の缺點を擧ぐるに急にして、成功する所以の手段を誤解し、摯實熱心を以て愚者の事となすが如きに至ては、與に成功を談するに足らざるなり。吾人は飽くまでも着實の思想を養ひ、穩健なる武歩を以て徐ろに最後の勝利を占むるの覺悟なかるべからず。

○人は皆一定の収入に依て衣食すべし

毎月俸給を得つゝある者は、其俸給に依て衣食せざるべからざる事勿論なれども、一定の俸給を得ざる者に在ても、必ず一定の支途を豫定し之を依て生計を營むべし。若し此原則を破れば忽ち着實の風を損して輕佻浮薄に陥り、遂に一身一家を亡ぼすに至る者比々皆然らざるはなし。カーチギーは郵便配達兼電信技手に身を起して、凡百の缺乏に堪へ、自ら着實勤勉の美風を存養して、遂に一代の大富豪と仰がるゝに至れり。彼れが成功の秘訣は終始其分を守りて奢らず飾らず着實の思想を失はざりしに在り。

社會に出で、此くの如き生活を營まんと欲する者は、先づ青年時代に於て之が

習慣を形造くることを要す。學生にして身分不相應の金錢を消費し、動もすれば友人間に負債を起す者の如きは、他日社會に出づるも容易に此惡習慣を脱することを得ず、遂に世の信用を失ふに至るや必せり。又儉約を旨として凌がば凌ぎ得べき學資を有しながら、他の浮華に倣はんが爲め殊更に時間を割いて内職に依る收入を得んとする者の如きは、既に着實の思想を缺如するものにして、實に勉學の上に於て其弊を受くるのみにあらざるなり。要するに所謂入るを計りて出づるを制し、餘裕あれば即ち之を蓄積して不慮の出費に備ふるは、着實穩健の思想を養ひ一は以て獨立自恃の精神を維持する所以にして、學生時代たと否とを問はず、世に處して成功の彼岸に達すべき手段なり。

第五章 犠牲の精神 其一

○犠牲の精神とは何ぞや

嘗て泰西の美譚として次の如き談話を聽きたることあり。或る少年、鐵道線路を横切らんとして、偶々河水汎濫の爲め鐵橋の墜落したるを發見したり。然るに前路に此かる珍事ありとは夢にも知らざる一列の汽車は遙かに、黒煙を吐いて此落ちたる鐵橋に向て近づきつゝあり。此光景を認め得たる少年は直ちに走て汽車に向ひ、手を振り聲を噴らして百方危険を報じたれども、汽車は少しも頓着なく全速力を以て其進行を續けつゝあり。最早事は危機一髪の間迫り一刻も猶豫すべき場合にあらず。嗚呼此際、少年は如何に其身を處したるか、彼は猛然として其心を決したり、縦し一身を犠牲に供するも多數の人命を救ふに如かず。乃ち彼は線路の上に立ち塞がり、兩手を擴げて一步も動かざるの姿勢を示したり。此時機關手は初めて此有様を望見して、驚いて汽車の進行を停止し、幸にして一同無事なることを得たりと云ふ。

之に酷似せる一事件は最近に於て我鳴戸海峽に起りたり。彼の地の一老漁夫が

偶々一汽船の暗礁に向て進航しつゝあるを發見し、極力危険を注意したれども其効なく、咄嗟の場合殆んど施すに術なく、己むなく自己の小舟を操りて殊更に汽船の進路を遮り、遂に之と衝突して身は海底の藻屑と消えたるも、汽船は爲めに方向を轉換し、多數の乗客と船員とは悉く無事なることを得たりとは、新聞紙の報する所なり。

前段の少年と云ひ、又此老漁夫と云ひ、已れを無にして多衆に殉せんとする其心事の高潔純美なる、人をして感嘆措く能はざらしむるものあり。又彼の村上義光の護良親王に於ける、佐藤繼信忠信兄弟の源義經に於けるが如きは、皆臣下として主君の難に殉したるものにして、此くの如き類例は我史上に甚多し。

或は君國の爲めにし、或は一家の爲めにし、或は他人の爲めにする等、事に大小輕重の區別あれども、要するに一身を捧げて公に殉するの義心は即ち犠牲の精神なり。而して假令其身を殺すに至らざるも、斃れて後己むの大勇猛心を以て、他の爲めに努力奮闘するは即ち犠牲の精神の發揮なり。故に此精神は人の心情として最も高潔に、最も純美に、最も尊敬すべきものにして、恰も玲瓏玉の如きものありと謂ふべし。

○我國に於ける此精神の發達

犠牲の精神は、我國に於て最も顯著なる發達を遂げたり。蓋歐米に於て個人主義の盛なるに反して、我國は古來家族主義を以て立ち、祖先の名を重んじ一家の祀を尊むの風厚く、延て一國の宗家たる皇室を尊崇するの念を生じ、發しては武士道となり、凝ては大和魂となりて、國民愛國の至情は油然として湧くが如きものあり。是れ即ち我國民が私人としては一家に殉し、公人としては君國に殉する精神の古來甚熱烈なる所以にして、皇統連綿として天壤と與に窮りなき貴重なる國體を保有し得たる所以のもの亦實に茲に存す、犠牲の精神は即ち我國に於て世

界無比の發達を遂げたるものと謂ふべし。

教育勅語に「一旦緩急あらば義勇公に奉じ」とあるは即ち國民に犠牲の精神を教へられたる聖旨なり。忠勇義烈は即ち君國に對する犠牲的精神の發現にして、建國以來最近日露の役に至るまで、國民が此精神を發揮したるの例擧げて數ふべからず。飯盛山上白虎隊の英靈を吊ふ者、又は泉岳寺畔大石良雄以下四十七士の墓に詣づる者、誰か彼等の忠勇義烈に感奮せざる者あらんや。彼等は實に生命を鴻毛の輕きに比して、或は自家の仇を報じ或は國難に殉したるものなり。其心事の高潔玲瓏たる眞に日月と光を争ふものありと謂ふべし。吾人は萎靡たる幕府の末代に斯かる忠臣義士の現出したるを見て、我國に於ける犠牲的精神が、如何に根底の深きものあるかを信せずんばあるざるなり。

○我國の女子と犠牲の精神

犠牲的精神は又我國の女子の間に著しき發達を遂げたり。古來我國女子教育の要諦は之を温順貞淑の四字に約することを得べく、温順貞淑は即ち取りも直さず犠牲の精神に基くものなり。女子の三従と稱して、子としては親に従ひ、嫁てしは夫に従ひ、老いては子に従ふと云ふが如き、皆自己を空うして他に従ふ犠牲的精神を教ゆるものにあらざるはなし。女子に此くの如き美德ありて初めて一家は圓滿に治まることを得べく、我國の家族主義は即ち女子の犠牲的精神に負ふ所甚大なりと謂ふべし。

ルーズヴェルト氏曰く、「男子の社會に立て公の職務に就き、國家社會に貢獻するを偉なりとすれば、女子の一家の主婦となり、夫を扶けて夙夜獎勵慰籍に力め、失意にも愁訴する所なく、得意にも虚榮の夢に驅らるゝことなく、身は多數子女の母となりて之を教養指導し、心身共に強健なる國民として之を社會に寄與するの功は亦以て偉なりと謂はざるべからず。蓋女子の本分は全く茲に存し千秋萬古

踰るべからざる大義なり」と。ル氏の言ふ所何ぞ我家族主義の理想と吻合するもの多き、彼れの此言をなす恐くは現今歐米に於ける女子の弊風に激する所ありしものならん。ル氏の憂とする所は正に吾人の憂とする所なり、近來女子教育の發達に従て、我國固有の女子の美德は反比例に益々衰頽しつゝあるの感あり。即ち彼等は日に浮華虚榮の弊に染みて、着實溫柔の氣風を失ひつゝあり。此くの如くにして豈高潔なる犠牲的精神の如き、之を彼等の間に求むることを得んや。人或は婦人の社會的地位の向上を論し、動もすれば即ち「婦人の解放」と云ふが如き奇矯の言語を弄し、甚しきは婦人參政權の附與を唱道する者あり。是れ女子の美德を損し其本義を没却するものにして、彼の甘言を以てイーヴを魔道に導きたる悪蛇の如きものなり。要するに家庭は即ち主婦の領分にして。女子は皆家庭の良女王たることを心懸げざるべからず。女子にして此心懸なくんば、家庭は忽ちにして團樂の樂を失ひ、延て一國一社會を通して秋風落寞たるものあらん。戒心せざるべからざるなり。

○一家に於ける犠牲の精神

人呱呱の聲を揚げてより長じて獨立の男子となる迄、家庭は勿論周圍の社會より受くる所の恩義は、正に海よりも深く山よりも高きものあり。一念此處に及ぶ毎に感謝の心油然而として湧くが如きものあるは即ち人情の自然にして、犠牲の精神は實に此感謝の意を表せんと欲する處に胚胎するものなり。古賢曰く「父母我を生んで劬勞す」と、父母の子女を養育するも、又子の父母に孝養を盡すも、共に一身を捧げて他の爲めにする犠牲の精神に起因するものにして、此の父子の關係に基く家族主義は、我國に於て世界に比類なき發達を成したること前段既に説明したるが如し。犠牲の精神は即ち家族主義の本源にして、一族の親睦は之に依て圖るべく、一家の繁榮亦之に依て期すべし。而して獨り一族一家の親睦のみな

らず、大にしては舉國一致の美風は亦此處に涵養せらるゝものなり。

之を歐米諸國の風習に觀るに、個人主義を奉ずるの結果、父子兄弟互に相獨立して顧みざるを普通とし、其關係の冷々淡々たる吾人の殆んど了解に苦しむ所なり。翻て我國に於て男子の功名富貴を求むる所以は、一身の榮譽の爲めにあらずして、寧ろ一家を興して父祖の名を顯揚せんと欲するの動機に出づるものと謂ふべし。我國に於ては即ち父子兄弟一團となりて家名を顯彰することに努力しつゝあるの趣あり、是れ寔に國民の間に犧牲の精神の磅礴たるを證するものにして歐米に於ける個人主義に比して、其美醜の懸隔日を同うして談ずべからざるなり。

○此くの如き實例あり

歐米人は一家に於ける犧牲の精神に於て遠く我國に輸するものあること、前述の如くなれども、中には一家に對する苦節高義實に感嘆に値する者あり、蓋大體

に於て人情に東西なきが爲めならん歟。米國に於てアーヴキングと云へば文豪として一代に雷名を轟かしたる名士なり、彼れが文名一代に高く或は遣外使臣の顯職に就くに至りしは其壯年以後の事にして、青年時代立身の首途に於ては、如何に一家の犠牲として慘憺たる生活を送りたるか、眞に同情に堪へざるものあり。後年彼れが天下の文豪となりしは、畢竟するに一念家族に殉する精神の報酬たりしなり。嘗て彼れの手記せる所に據るに、彼れ青年にして一法衛の吏員たりし時弟妹等は皆彼れの庇護を仰ぎ、辛うじて一家を支持するの窮境に在りき。即ち下級の吏員として其収入は固より多からず、家族は多人數にして米鹽の資屢々缺乏を告ぐる事ありしが、其都度彼れは莞爾として家人に謂て曰く、「憂ふること勿れ少しく筆を執らば物資は忽ち供給せらるべし」と、實に彼れは孜孜汲々筆を執て家計を補ふことに努力して倦まざりき。此くの如きもの年々歳々改むることなく鍊磨の功は遂に後年の大名を成す基礎となりしなり。彼れ又曰く、「自分に取

乾燥無味なる法律事務は速かに之を廢して、趣味深き文筆の事に職を求めんとし、たること其幾回なるを知らず、然れども弟妹等が法服の袂を捉へて無邪氣に喜戯するを見るの時、一家の爲めには如何なる不愉快なる職業にも忍んで従事することを思へり」と、其心事實に人を動かすに足るものありと謂ふべし。

此くの如きは社會に於て其事例に乏しからず、市井の少年少女にして奇特にも一家支持の爲めに奮闘しつゝある者の如き、新聞紙の屢々傳ふる所なり。男子苟も此精神を以て世路に立たば、勉學時代の小障害の如きは殆んど之を眼中に置かずして可なり。

第六章 犠牲の精神 其二

○國民奉公の觀念

個人として一家に奉ずるの精神に就ては、前章に於て略々之を論述したり。乃

ち本章に於ては國民として國家社會の爲めに一身を犠牲に供する精神の缺くべからざることを論ずへし。近頃物故したる露國の文豪トルストイは、北歐文壇の一大明星として兎も角も思想界に一大勢力を有したり。然れども彼れの説く所は極端なる個人主義極端なる非國家主義にして、吾人の最も排斥する所なり。彼れ曰く「愛國心なるものは今日に於て最も不自然不正且有害なる感情にして、現に人類の蒙りつゝある害惡の大部分は其起源を愛國心に發するものなり、故に此かる感情は之を養成すべからざること勿論にして、寧ろあらゆる手段を以て之を鎮壓し根絶せざるべからず」と、彼れは斯かる見地に於て戰爭の慘害を説き、租税の重荷を説き、遂に彼れの所謂人類の平和を破りつゝある政府は之を有害にして無益なるものとせり。彼れの非戰論、平和主義は議論として價値なきものにあらず、然れども社會凡百の害惡を愛國心に歸して此美なる犠牲の精神を呪はんとするは、彼れの議論の偏狹にして誤謬に陥りたる結果なり。吾人は彼れに反問せ

んと欲す、「何人も汝の言の如く個人、平和個人、幸福をのみ希ふに至らば、人類共同の生活は如何にして之を支持することを得べきか」と。既に前篇國家の保護の節に於て論じたるが如く、國家の保護ありて初めて吾人の生活は安泰なることを得るものにして、國家社會は直接に吾人に衣食を給せず、又謂はれなく金錢物品を給することなければ、間接に吾人の生活を扶助し保護するの恩義は即ち之を忘却すべからず。吾人はトルストイが餘りに眼前の利害に執迷して、大局に通ずるの明なく、國家社會の恩義を藐視し、延て人類共同生活の本義を没却するに至りしを悲しむものなり。要するに個人として一家に殉するの精神を貴重なりとすれば、國民として將は社會の一員として公に奉ずるの觀念を奨励せざるべからざるなり。

○租税と兵役

「日本臣民は法律の定むる所に従ひ兵役の義務を有す」とは我憲法第二十條の規定にして、「日本臣民は法律の定むる所に従ひ納税の義務を有す」とは同法第二十条の規定する所なり。此兵役の義務及納税の義務は國民の負擔する所の二大義務にして、俱に所謂奉公の義務と稱すべきものなり。吾人にして苟も國家の保護を認め其存立を必要とする以上、一は以て國家所要の費用を負擔し、一は以て外敵を防禦するの義務を負はざるべからず。生命と財産とは人間の最も重んずる所にして、一方に於て國家は人民の生命財産の安固を保護する代りに、他方に於ては此公の目的を達する爲め、人民の一部に對して兵役及納税の義務を負擔せしむるものなり。即ち此等の義務は一身の私を棄て、國家の公に奉せんとする犠牲の精神に基源するものにして、國民に此くの如き精神ありて初めて國家は安んじて其職分を盡すことを得べきなり。若し國民にして彼猶太人の如く、自己一身の利益を圖るにのみ急にして、奉公犠牲の精神を缺如するに至らば、國家團體は其存立

の基礎を失ひて茲に解體滅亡するの外なきなり。誰か國民奉公の義務を回避して縁由ある祖先の國を滅ぼし、却て他國の爲めに同一若くはより以上の義務を負担するの愚をなす者あらんや。然れども眼中利慾の外に何物なき猶太人の如きは、好んで此くの如き愚を演じたり。吾人は此點に於て我國民の犠牲的精神の秀逸なるを信じ、隨て我國民的團結の甚鞏固なるものあるを誇らんと欲す。若し夫れトルスイト一流の不健全なる思想に浸染して國家の基礎を危うする者あらば、容赦なく之に誅戮を加へざるべからざるなり。

○特に兵役の義務に就て

生命財産の中生命は最も重く財産は之に次ぐ、而して租税として公納する所のものは財産の一小部分たるに過ぎず。然るに兵役は壯丁全身の勞務を要求するのみならず、一旦彈丸雨飛の間に馳驅するに當ては、他に掛替なき生命をも提供せ

ざるべからず。於是乎、兵役の義務に就ては、或は之を野蠻なりとし、或は之を苛酷なりとし、國家の制度なるが故に己むを得ずして服従するの外なしと考ふる者なきにあらず。然れども如くの如きは國民犠牲の精神の何物たるかを解せざるものなり。抑犠牲の精神とは既に論じたるが如く己れを忘れて公に殉するの意氣なり、而して其公に殉するに當ては、財産たるを將た身體生命たるは唯輕重大小の差別あるのみ。斯かる大精神を發揮するに當ては、固より宇宙と同化するが如き大氣魄を要するものにして、商人が厘毫錙銖の差を争ふが如き小なる態度を以て之を論ずべきにあらざるなり。故に一錢の租税を納むるも千圓の租税を納むるも、將た亦身體生命を犠牲に供するも、其心懸は即ち一ならざるべからず。此觀念を以てすれば、兵役の義務が他の公務に比して如何に其勞苦の大なるものありとするも、それは問はずして可なり。勞苦の大小・報酬の有無の如きは、犠牲の精神の存する所之を論ずべき場合にあらざるなり。勞苦の多大にして而も何等の報

酬のなき所、寧ろ高潔純美なる犠牲の精神を完全に發揮するものと謂ふべし、任に兵役に就く者、須らく先づ此道理を解得せざるべからざるなり。

○兵役の吾人に與ふる利益

凡そ社會の事勞力に對して報酬あらざるはなく、一舉手一投足の微も亦徒爾ならざるべきは是れ天則なり。兵役は義務として最も重くして而も之より得る所の現實の利益は何物もなきが如くなれども、實は必ずしも然らず。朔風雪を捲いて銃を執るの手將に凍えんとするの時、若くは炎天に燬かれ霖雨に打たれて十里の行軍に氣息の奄々たるを覺ゆるの時、人間の勞苦何物か之に如かんやの感あれども、之が爲めに身體をして風雨寒暑に堪ふるの力を得せしむること論を俟たず、即ち兵役は先づ身體を強健ならしむるの益あるものなり。次に兵役は精神を鍛鍊して堅實なる氣風を養ふに最も效益あり。一般社會の風潮が漸く姪靡浮華に流れ

て勇敢堅實の氣風は地を拂て喪はれんとしつゝあるの際、我武士道の精神とも云ふべき素朴謹嚴なる氣風は依然として兵營生活の裡に存し、一たび身を此境に置けば、恰も封建時代の武士と起居を與にするが如きの感あり。殊に前述の如く櫛風沐雨、臥薪嘗膽と云ふが如き文字の意義を實際に味ひ得るの機會甚多く、爲めに懦弱なる精神をも剛健にし、如何なる難苦をも意とせざるの習慣を養ふことを得べし。以上の如きは即ち大なる報酬利益にあらずして何ぞや。即ち此強健なる身體と賢實なる精神とを資本として社會に臨まば、他の視て以て至難とする所も甚易々たるものあるを感すべく、二三年の日月は寧ろ其得る所に比して甚短かゝりしを覺ゆべきなり。殊に況んや犠牲の精神の發揮として兵役の利益は之を豫期すべからざるものなるに於て、此くの如き身心に關する利益は之を意外の贏利となすべきに於てをや。

○實戰の教訓

吾人は幸にして明治の聖代に生れ、東西文明の餘澤に浴しつゝあるのみならず、
 輓近日清日露の二大戦役に依りて他國人が容易に經驗することを得ざる實戰の教
 訓を得たり。實戰が軍事上に資益する所多きは言ふまでもなき事なれども、其國
 民一般の精神を訓練するに多大の效益ありしことは亦之を没すべからず。親しく
 戰陣に立たざる所謂後援者が一朝事ある時に際する覺悟及實驗は暫く之を措き、
 身自ら砲煙彈雨の間に立つに當ては、即ち平生訓練する所の奉公犧牲の精神を發
 揮すべき秋にして、學生も商人も將た農夫も一樣に戰線に立て、護國干城の任務
 を果さざるべからず。或は塹壕の中に在て夜半夢驚き易く、或は後方の給養屢々
 絶えて饑渴交々臻り、或は白兵混戰の間に投じて生死を一撃に決せんことを。此時
 に當て恃む所は唯上官の言容と左右の戰友とあるのみ、進撃の命あらば躍て敵

陣を屠るべく、防戰の令あらば留て壘塞を死守すべし、是に於て其任や重くして
 生命は鴻毛よりも軽く、寧ろ一命を抛つも其責任を完うせんことを期せずんばあ
 らず。是れ即ち吾人の實戰に學び得る所の貴重なる教訓なり。而して一旦戈を戢
 めて家郷に歸るや、死生の間に學び得たる所の堅忍不拔の氣象と責任を重んずる
 の觀念とは、自然に日常の業務の上に發揮せられて、其周圍を感化し他を興奮す
 るの利勝げて言ふべからず。獨逸の現皇帝ウキルヘルムが「戰爭は壯美なるもの
 なり」と言ひて非戰論者を攻撃したるが如きは、必ずしも吾人の感服する所説に
 あらざれども、一面に於て戰爭の教訓の甚偉大なるものあるを喝破したるものと
 謂ふべし。吾人は敢て戰爭を懲懲する者にあらず、然れども實戰の教訓が吾人に
 與ふる所の利益は之を否認すること能はざるなり。

○百事皆此精神を以て當るべし

水の低きに就くは其天性なり、人は又生れながらにして共同生活を営むべき資質を有す。犠牲の精神は即ち人生共同體の一員として人の自然に有する所の資質にして、此精神なければ人類は皆孤立拮据して恰も禽獸の群の如く、到底進歩したる社會を形造くること能はざるなり。一步を進めて之を論ずれば、人類社會は物理的に群集するものにあらずして、化學的に團結するものなり。是れ人類社會が他の動物の社會と異り、團體として最も進歩的の意義を有する所以にして、萬物の靈長たる活動は正に此處に發源するものと謂ふべし。而して犠牲の精神は即ち人類相互の關係を化學的に結合せしむる所以にして、他の動物は斯かる高尚なる精神を有せざるが故に、意味ある社會を形造くること能はざるなり。故に人は常に此精神を以て行動云爲すべきものにして、他の動物と異なる所の崇高偉大なる

人格は初めて茲に現はれ、人生をして頗る意味あるものたらしむることを得べきなり。今や實利主義は社會の上下を風靡し、高尚なる犠牲の精神の如きは之を説くを迂なりとするの風潮あり、豈憚して慨せざるべけんや。嗚呼私利私慾は人類をして禽獸の域に墮落せしむるものなり、徒らに權勢利慾を追逐する者は、猿猴の冠し又食を爭ふと擇ぶ所なき者なり、此くの如くにして豈國家民人の興隆發展を期することを得んや。苟も心を世道人心に置く者、方今の時勢に寒心せざるべからざるなり。

第七章 樂天の氣風

○人生一日も樂天の氣風なかるべからず

人事多く意の如くならざる事は既に屢之を論じたり。故に自信の念厚からず樂天の氣風に乏しければ、不平不満の念絶えず心頭に空湧して日常の業務に専ら

なるを得ず、隨て不平は益々不平を生み、終に自暴自棄に陥らざる者甚尠し。若し亦意思は如何に鞏固なるも、自主獨立の精神は如何に旺盛なるも、天命を樂んで心氣を平にすることを得ざれば、意外の事ある毎に圓満具足の人格を損して頑冥偏屈となり、終に一身を誤るに至らざるは即ち幸なり。由是觀之、人生一日も樂天の氣風なかるべからざるなり。

悠然として彼の天地を觀るに、怒るときは即ち風雨雷霆、天柱地軸も爲めに挫けんとし、嚴なるときは即ち秋霜烈日、禽獸草木も爲めに滅びんとす。然れども日月は依然として其光を減耗することなく、和風甘露、常に萬物を生育しつゝあり。人生も亦此くの如し、喜怒哀樂は氣候の變遷極りなきが如く、一日も感情の變化なきことを得ざれども、心の本體は即ち廓然として凝滯する所なく、大虚と與に同化するの覺悟なかるべからず。故に大局よりして之を觀れば、紛々たる世事も深く吾人の心を動かすに足らざるものあり、是に於て即ち泰然として人生を樂しむことを得べし。

エマーソン自然を論じて曰く、「彼の蒼穹を見、此自然に對すれば、實に包容無邊にして、限りなきの慰安は此中より湧出するを覺ゆ」と。然り、我痛める胸を慰撫し、我疲れたる心を鼓舞し、悠然として據る所あらしむるもの、豈獨り山間の明月と江上の清風とのみならんや、自然は總て吾人を慰安する最良の朋友なり。ウオーヅウオルスは「一片の木の葉にも涙に餘る意味あり」と云へり。春花秋月、眼に入て新ならざるはなく、此くして人は光明ある自然に包容同化せられ、區々たる不平不満の如きは悉く之を一掃して、唯醇化せる無心の我を見るべし。於是乎、人間活動の勇氣も自ら醸成せられて、縱横に社會に奮闘し、以て人生の幸福を享受することを得べし。

○不平不満多くは取るに足らず

日夜利慾に醒醒として世俗の事に忙殺せられつゝある者は、例へば雲間に閃々たる雷電の忽ちにして輝き忽ちにして消ゆるが如く、常に感情に支配せられて瞬間も静座安居することを得ず、盖物慾に役せらるればなり。反之人に會はず世に交らず、全く世俗の事を嫌忌して社會の外に超然たる者は、例へば死灰枯木の如く、一點の暖氣なく又一片の生氣なく、殆んど死者と擇ぶ所なきを以て、眞に社會の厄介物たるに過ぎず。今日生存競争の熾烈なる社會に於て、此かる消極の極端なる仙人風の厄介物は、殆んど其存在を許さざれども、積極の極端なる神經質の厄介物に至ては、年を趨うて益々其數を増加しつゝあり。彼の宇宙の不可解と嘆じて、華嚴の瀧に投じたる者の如きは即ち此積極的の神經病者の適例にして、千古の碩學も猶未だ宇宙を了解し得たりとせざるに、乳臭の少年を以てして敢て

宇宙の不可解を鳴らして其身を殺すが如きは、其愚や及ぶべからざるものありと謂ふべし。方今青年社會の通患たる煩悶病の如きは、即ち取るに足らざる不平不満の爲めに神經を過敏ならしめたる結果にして、有爲の身を以て其前途を誤る者多きは最も戒しめざるべからざるなり。

吾人の世に處するや、此くの如く神經を過敏ならしむるの不可なりと同時に、又全く無神經に陥るべからず。之を宇宙の大局に鑑みるに、動中靜あり靜中動あるは即ち天理自然の法則なり。人生も亦此くの如し、須らく定雲止水の中、鳶飛び魚躍るの趣なかるべからざるなり。

動の極は靜、有の極は無、大極は大虚と一體にして、大慾は無慾と一致するが如く、大なる不平大なる不満は結局不平不満なきと異ならず。男子苟も不平不満あらば、此大不平大不満を抱くべし。大不平大不満は直ちに一轉して吾人を光明進歩の世界に導くべきなり。諸子若し此間の消息に通すれば、必ずや豁然として大悟

徹底するものあらん。

○如何にして樂天家たるべきか

如何なる困厄に會しても悠然として之に當らんと欲すれば、先づ樂天の氣風を養成せざるべからず。而して樂天の氣風を養成するには、常に光明の方面を見て陰暗の天地を顧みざるを要す。人生を苦界なりと信すれば即ち眼に觸れ耳に聞く所のもの一として、吾人の心を破らざるものなし、反之人生を樂界なりと觀すれば、森羅萬象悉く自己の爲めに造らるゝが如き感あるべし。光明の世界は快活なる精神の宿る所にして、茲に進歩あり、活動あり、幸福あり。若し夫れ陰暗の方面をのみ見る者は、氣屈し意阻みて退嬰挫屈、茲に不平不満を生じて不健全なる思想に襲はれ、往々にして又險惡なる思潮に乗せらるゝの禍あり。豈恐れて戒しめざるべけんや。

宗教家が「苦樂は世の中に在らずして皆心の中に在り」と説くが如きは、即ち心懸の如何に依りて苦も樂となり樂も苦となる事を喝破したる者にして、所謂心一つの擢の取り様にて樂天の氣風を養ふに難からず。抑人は生れながらにして平等なることを得ず、或は王侯の家に生るゝ者あれば、或は一日の生計にも困難なる貧家に生るゝ者あり、其長じて社會に立つに當ても亦人事の變轉極りなき、窮達に運不運あるを免かれず。此くの如く天運は人力を以て左右すべきにあらず、人力を以て左右することを得ざるの運命は之を天意に任かすの外あるべからず。故に人は皆自己の宿命を信じて敢て之に抗拒するとなく、一切の困厄は皆自己を試練すべき天の暗示となし、從容として之に應ずるの覺悟なかるべからず。戒の人に大任を下さんとするや先づ其心思を苦しましむ、吾人の進路を遮ぎる一切の障害困難は、毫も不平不満の材たらずして、寧ろ奮勵興起の機會たらずんばあらざるなり。古語に曰く

天薄^{スルニ}我以^テ福、吾厚^ニ吾德^ヲ以^テ迓^レ之、天勞^ニ我以^テ形、吾逸^ニ吾心^ヲ以^テ補^レ之、天阨^ニ我以^テ遇、吾亨^ニ吾道^ヲ以^テ通^レ之、天且^ニ奈^ニ我^ヲ何^ニ哉。

と。此の如く天の運命は如何に嚴なるも、屈せず逆はず自由に之を左右するときは、天我を奈何ともすること能はざるべし。樂天の氣風は正に此くの如くにして涵養せられ、光風霽月、悠々として人生を樂むことを得べし。

第八章 身體の訓練

○身體は活動の根源なり

西洋の格言に曰く、「幸福は先づ健康に存す」(Happiness lies first of all in health)と。寔に健康は人生最大の幸福なり、如何に智勇辯力あるも、如何に權威の犯し難きものあるも、又如何に無盡藏の資財を擁するも、唯此健康にして不十分ならんか、其人の幸福は大半喪失したるものと謂ふべし。

殊に況んや身體は活動の根源なり、健全なる身體なくして如何に奮闘せんとするも、そは翼なくして飛ばんとするが如きものなり。今や社會の進歩に伴ひ、人間の活動範圍も亦益々廣く、隨て益々健全なる體力を必要とするものあり。而して學窓を出で、既に社會の人となるに至ては、世事務務身邊に蝟集し來りて身體を訓練するの餘暇を得ること甚困難なり。故に人は青年時代に於て大に身體を訓練して、他日の活動に準備する所なかるべからず。若し羸弱なる身體を以て社會の陣頭に立たば、人事の煩累は益々其健康を害し、事業未だ半ばならずして身は北邙一片の煙と化し、大志空しく地に委するの例甚尠からず。社會に立て大に活動せんと欲する者は、先づ青年學生時代に於て身體の訓練を怠るべからざるなり。

○外國青年間に於ける身體の訓練

タフト氏嘗て我國の青年に告白するの書に論じて曰く、「諸子にして活動の人た

らんと欲すれば、須らく先づ身體を強健にし、第二に精神を堅實にし、第三に目的を高遠にすべし」と。健全なる身體は活動の第一要件なり。試に今外國の青年が如何に其身體を鍊磨しつゝあるかを見るに、米國に於ては野球を以て國技となし都鄙を通じて青年學生の最も熱狂する所のものは即ち野球の遊戯なり。彼等が此くの如き野外の遊戯を嗜むは殆んど其天性に出で、壯年に入り老境に進むも猶其樂を改めず。現にタフト氏の如きも、身國務大臣たり大統領たるの時に於て尙閑を偷んで青年の間に伍してボールを手にしつゝあり。一般に米國人が體格偉大にして精神も頗る活潑々地なるものあるは、此くの如き野外遊戯に重きを置いて、其體力を訓練しつゝあるに基因するが如し。

英國の青年は端艇競漕に熱狂すること、猶米國人の野球に於けるが如し、年々歳々、テムス河上に於ける牛津、劍橋兩大學生の競漕は、獨り英國のみならず世界の視聽を集中するの觀ありて、此遊戯が如何に英國青年の身體を鍛鍊し士氣

を鼓舞しつゝあるかは、茲に論ずるの必要なからん。

其他一般に歐米人は戸外的にして、獨り男子のみならず。女子も亦體育に熱心なること、到底吾人の企て及ぶ所にあらず。殊に我國に於て壯年以後の男子が嬉々として遊戯に耽りつゝあるが如き光景は、遂に之を見ることを得ず。隨て我國民が歐米人に比して早老の傾きあるは注意を要する所なり。

○如何にして身體を鍊磨すべきか

昔時封建の時代に於て、士流青年の教育は學問よりも寧ろ武藝に重きを置きたるを以て、劍術、槍術及弓術の如き、青年の體軀を鍛鍊する手段も甚盛なりしが、今は即ち學問を重んずるの社會にして、戦争の方法の如きも亦古昔と大に趣を異にするものあるを以て、一人の敵を攻撃し防禦する武藝は自然に衰廢し、青年體育の方法として存するものは、僅に柔術の一あるのみ。柔術は加納治五郎氏に

依て今日の隆盛を致したるものにして、青年學生の身體を練磨し士氣を鼓舞すに最も適當なるものなり。相撲は又我國の國技とも稱すべきものなれども、一部専門者の興行的技藝となり、一般に普及せらるゝに至らず。其他は即ち野球、庭球、競漕等、海外より輸入せられたる遊戯なり。而して近來我青年間の野球戲が大に進歩して、布哇米國等海外に遠征を企つるに至りしは甚喜ぶべし。以上の外單獨的に身體を練磨する方法としては、體操、鐵亞鈴の如きも可なり、旅行、遊獵の如きも華族的の贅澤に陥らざる限り最も可なり、殊に旅行は常に身體を鍛錬するのみならず、智見を廣むるの利益ありて、吾人の最も推奨する所なり。要するに身體練磨の方法の如きは、諸子の心懸次第にて如何様にも之を發見することを得べく、敢て吾人の喋々を竣たざるべきを信ず。

○身體訓練の偉大なる實例

人の身體及精神は訓練に依りて必ず偉大なる効果を收むることを得べし。予は生來病弱者なりと云ひて其訓練を怠るが如きは、薄志弱行者の事にして、苟も社會の活舞臺に奮闘せんとする者の口にすべきことにあらず。吾人は茲に前の米國大統領ルーズヴェルト氏に於て争ふべからざる好教訓を得たり。氏は素と紐育名門の出にして、幼より身體胚弱、數次病魔に犯され、醫師は氏が學業を廢せんことを勸告したる程なりき。然るに氏は身體の羸弱なる代りに頗る鞏固なる意思を有したるを以て、以爲らく「我體力の羸弱なるは生理上一時の障害のみ、故に鍛錬其宜しきを得ば、他日強健無比の體力を有するに至らんこと疑ふべからず」と。依て氏は其病弱の身體を提げて忽ち熱心なる運動家となり、野球、庭球、乗馬等凡ゆる遊戯に於て練達せざるなく、學窓に在るの間常に「チャンピオン」を以て儕輩の間に鳴り、更に屢々山野を跋涉して獸獵に耽り、其體力を訓練するの道に於て盡さざる所なかりき。是に於て曩に日夕醫藥に親しみて形容枯槁顔色憔悴た

りし病少年は、一變して赭顔豊頬、常に氏の寫眞に視るが如き筋骨隆々たる健兒と化し、隨て生來の意氣益々剛健なるを得たりと云ふ。尙氏が其自信を斷行して飽くまでも鍛鍊の功を積まんとするの意氣は、氏が甚しき近視眼なるにも拘らず、練磨の結果射撃に於て百發百中の妙ありと云ふに於て之を窺知することを得べし。西賢の言に、「人は二個の造物主を有す、其一は天なり人に生を享けしめたるもの、其二は自己なり自ら其性格を陶冶す」と云ふ事あり。ル氏の如きは、天に享くる所寧ろ薄くして、自ら鍛鍊陶冶の功を積みたるものと謂ふべく、吾人は氏に於て眞に勇者の面影を窺ふことを得べきなり。

○鞏固なる精神は健全なる身體に宿る

身體の鍛鍊は常に活動の資本として身體其物の強健を致すのみならず、同時に亦心膽を練り精神を鞏固にすることを得べし。身體羸弱なれば精神も亦隨て萎靡し、假令事を爲さんとするの意あるも之を果すの氣力に乏しきを免かれず。故に古より鞏固なる精神は健全なる身體に宿ると云へり。而して身體の訓練は其發育の時期に於てするを最も有効なりとす、一旦青年血氣の時代を経過すれば、生理上社會上之が訓練を圖ること容易ならず。青年諸子たる者茲に留意して常に身體の訓練に努め、以て他日繁劇なる社會の實務に執掌するの覺悟なかるべからざるなり。

第九章 時代の風潮

○天下の大勢

古來社會發達の大勢を通觀するに、單純なる状態より複雑なる状態に進步するを以て自然の順序とす。而して社會の複雑なるに従ひ、種々の紛糾したる問題を發生して、人は之が解決に忙殺せらるゝの状态なり。彼の有名なるマルサスの

人口論（人口は幾何級數を以て増加し食物は算術級數を以て増加す、故に人口の増加は之を豫防すべしとの議論）の如き、其初めに於ては杞憂に過ぎざるが如きの觀ありしもの、今日に於ては其主張が着々社會に實現せられ、人口の増加に伴ふ社會的問題の解決は、著しく各國の爲政家及學者等の頭腦を惱めつゝあり。即ち東西の文明諸國に於て、年々非常の勢を以て増加しつゝある人口は將に國內に溢れんとし、如何に其の活路を開くべきかは國家的問題として最も重要なものなり。之が爲めには租税も増徴せざるべからず、軍備も充實せざるべからず、商權も擴張せざるべからず。露國が我國に對して無謀の戰端を啓きたるも之が爲めなり。獨英の諸國が着々として東洋の天地に勢力を移植しつゝあるも之が爲めなり。米國が其多年執り來りたるモンロー主義を抛擲して世界殊に東洋に活躍せんとするも之が爲めなり。日英同盟も、露佛同盟も、三國同盟も、日露協商も、米清及米獨の接近も、將た亦最近に清國と英米獨佛との間に成立したる四國借款

も皆之が爲めなり。天下は恰も支那に於ける春秋戰國の時代の如く、或は我國に於ける元龜天正の亂世の如く、一日も油斷すること能はざるの形勢なり。

○政治界の難局

世界の勢は大凡此くの如し。是に於て國家の運命を其双肩に負擔する所の政治家の苦衷は大に諒とすべきものなくんばあらず。即ち彼等は一方に於て、國權を擴張して國民の爲めに其進路を開拓すべき大責任あると同時に、他方に於ては軍備を擴張する爲め國民に重税を課し、勢其生活を壓迫せざるべからず。彼等は即ち内憂外患に挾撃せらるゝチレンマの地位に立つものなり。此くの如く方今の政治家の立場は甚困難なるものありて、之に對して萬全の成功を期するは抑無理なる注文なり。或は事務の簡捷を圖り、或は吏員の淘汰を斷行し、或は不要の軍備を縮少する等、如何に冗費を省いて之を必要已むを得ざる費用に充つると

とを得るかい、即ち政治家の手腕技倆の存する所なり。故に今日に於て政治家は醫師の病人に對して種々の對症療法を施すが如く、時勢の趨向を察して其時々適當なる政策を實行するの外なき有様なり。之を我國の現狀に就て觀察するに、獨り在朝の官僚政治家のみならず、人民の聲を代表すと稱する政黨自身も亦昔日の如く徒らに堂々たる主義綱領を標榜して之に拘束せらるゝを避くるの風あり。以て如何に列國競争の激甚にして、一國施政の困難なるものあるかを想見するに足らん。

○現實主義の流行

世界の**大勢**並**政局**の推移は前途の如くにして、**個人**の生存競争も亦年々共に益々激烈なるべきこと論なし。故に**個人**と**國家**との別なく、最も痛切に解決を必要とするものは即ち**生活問題**なり。於是乎、**社會一般**の風潮は現實を尙んで理想を度外視し、説教を聞かんよりは寧ろ**麵包**を與へられんことを望むの風あり。

嘗て之を都下知名の割烹店主の談に聞く、「今日に於て眞に料理の風味を味はんとするが如き**華客**は絶へて之を見るに由なく、**萬事實質**を重んじ**輕便**を尙ぶの世なり」と。是れ獨り**飲食物**に於て然るのみならず、**政治**も**道德**も**文學**も**宗教**も、**其他社會一般**の事に亙りて、**現實主義**の流行は益々甚しく、**樂隊**にて**嘶**し立て**活動寫真**に中りを取るは即ち今日の時勢にして、**何事**にも**輕薄**にして**現實的**なるは即現今の**社會**に**磅礴**たる風潮なり。隨て或は**大義名分**を唱へ、或は**理想抱負**に執着する者の如きは、時代後れの人物として**排斥**せらるゝの勢なり。嗚呼是れ實に現代の**社會**に**横溢**する所の風潮なり。

○反動の思潮

此くの如く**現實主義**は靡然として**社會人心**を支配しつゝ、**人**は悉く**金錢**の**奴隸**となり**人爵**に**眩惑**せられて**高尚**なる**思想界**より**離隔**し得るものにあら

故に一方に時代の風潮を追逐する者あれば、他方には此風潮に平ならざる者あり。而して此等の不平者は自ら時代の激流奔湍に翻弄せられ、人を教へんとし、却て自ら饑うるの境遇に陥ること珍しからざるを以て、茲に時代を呪咀せんとする一種の反感を挑發し、天涯地角身を容るゝに處なく、遂に或は險惡なる思想に感染する者あるに至る。近時天下の耳目を聳動したる幸徳事件の如きは、畢竟するに時代の不平者が時勢を曲解して此かる暴舉を敢てするに至りしのみ。彼等の信念が甚しく誤謬にして且不健全なるものなることは既に之を論じたり。然れども明治の昭代に此くの如き兇暴なる事件の突發したるは、偶々以て社會の裏面に如何に時勢を呪咀する暗流の瀰漫しつゝあるかを現示するものなり。吾人は爲政者、學者其他社會の先覺者を以て任ずる者が深く此點に留意して、時弊を矯正するの甚急務なることを信じて疑はざる者なり。青年諸子も亦能く時代の風潮を了解して、其弊を受けざらんこと甚肝要なり。

第十章 青年の覺悟

○職業の缺乏

マルサスは人口の増加に對して食物の缺乏を憂へたれども、今日運輸交通の便著しく發達したる社會に於て、甲地の缺乏は乙地の過剩を以て之を補ふことを得べく、饑饉不作の患害は却て昔時よりも減少したること明かなり。今日に於て最も緊急なる問題は即ち職業の缺乏なり。外國に於ては博士の馭者もありと聞く、我國に於て博士は雨後の筍の如く製造せられつゝあれども、未だ博士は昔日の學士位の價値を認められつゝあり。然れども求職者の徒らに多くして社會の需要の之に添はざることは顯著なる事實なり。嘗て警視廳に於て百名の巡查を募集したるに、二千餘名の應募者ありて、尙其中には高等教育を受けたる者も尠からざりしと云ふが如き、以て其一斑を推すに足れり。又新殖民地たる朝鮮は非常に

多数の求職者を以て充たされ、多大の資本を擁して何等爲すなしとの評ある東洋拓殖會社の机上にさへ、常に履歴書の山積せらるゝものありとは蓋誤聞ならざるべし。職業の缺乏は實に刻下の社會上重大なる問題なり。

○修學の困難

青年の進路に横はる所の一大障害として學校の缺乏せることは既に之を論じたり。陸海軍の諸學校の如きは、之を卒業すれば直ちに一定の職に就き得るものなるを以て、其志望者殊に多く、學校當局者は乃ち嚴重なる體格試験の關門を設けて、先づ入學志願者の半數以上を淘汰し、次に學術試験に於て僅に志願者の一小部分を採用しつゝある有様なり。其他の諸學校に於ても亦之と大同小異にして、招かるゝ者は多くして選ばれるゝ者は甚少き形勢なり。故に今日の青年は先づ修學の道程に就て非常の困難を覺悟せざるべからず。而して若し幸にして志望の學校を卒業するも、社會に職業の缺乏せること前述の如くなるを以て、社會に出で、直ちに相當の地位を占むること甚困難なり。此かる困難は年を重ねるに従て益々増進すべきを以て、今日以後の青年の前途は益々難境に沈淪しつゝあるものこと謂はざるべからざるなり。

○非常の覺悟を以て難關を擊破すべし

此くの如く今日の青年の前途は種々の難關を以て閉塞せられつゝあるが如き觀あれども、諸子は決して失望落膽することを要せざるなり。古より世路は坦々として砥の如きものにあらず、唯時代の進歩に伴て、人口も増殖し競争も激烈となりたるを以て、前人の努力を以てしては今日に成功するに能はざるのみ。故に前人の努力に更に一步を加へて奮闘するの覺悟さへあらば、必ず光明ある前途を望み得べきなり。旅順の堅塞も我忠勇なる將卒の努力に依て遂に之を抜くことを得

たり。彼等は實に萬死の覺悟を以て此戰功を收め得たるなり。吾人の世に處するも亦此くの如し、先づ必死の覺悟を以て心身を練磨し、向上の意氣を盛にし、凡ゆる誘惑を擊退して奮闘猛進すれば、如何なる難關も之を擊破するに難からざるなり。勇者の面前には矢石なし、諸子は決して逡巡踟躕すべきにあらざるなり。前人に一步を加ふるの覺悟、是れ諸子を成功の域に導く所以のものなり。曩には中學を卒業すれば社會に重んぜられたるもの、今は大學を卒業するも其職業を得るに難んせん。諸子は少し許りの語學に通じ、數學に達し、或は一と通り専門の學術を修むるも、直ちに社會に相當の地位を要求するの權利あるものと誤解すべからず。教育ある無職者は社會に充滿しつゝあり。諸子は先づ出世の首途に於て、軍隊に於ける二等卒の地位より漸次昇進するの覺悟なからべからず、然らざれば諸子の學問技藝も寧ろ無用の長物たるに終らんのみ。彼の乳臭の青年にして疾く既に安逸遊惰の生涯を夢想するが如きは、抑謬れるの甚しきものなり。

り。吾人は米國前大統領、領ルーズヴェルト氏の一子が、曩に大學の課程を畢りたる後、自ら進んで毛織物會社に入り、最下級の社員に列して夙夜營々勤勞しつゝありとの一話を紹介して、諸子の奮闘を望まんと欲するものなり。諸子は實に身を社會の最下級より起すの覺悟なきに於ては、徒らに求職難を訴ふるの資格なきものなり。

第三篇 各種の進路

第一章 官海

第一節 總說

○官吏とは如何なるものか

凡そ我國の如き君主國に於ては、國家の政務は總て君主の御一身に總攬せらるる所なり。然れども國家の事務の繁雜多様なる到底君主御一人を以て悉く親裁せらるべきにあらず、是に於て君主は多數の官吏を任命して國家の事務を分擔せしめつゝあり、故に官吏は即ち元首の手足となりて各々其擔當する國家の事務を處理する者なり。併し乍ら假令國家の事務を處理するも國家に對して特別の服従義務を負ひ、一身を捧げて定量なき國家の事務を處理する者にあざれば官吏と謂ふ

ことを得ず、故に兩議院の議員の如きは國家の立法事務に參與する者なれども、其事務には制限あり又特別の服従義務を有する者にあらざるを以て官吏にあらず。又兵卒の如きは一般臣民として兵役の義務を果す者にして、國家に對して特別なる服従關係に立つ者にあらざるを以て是れ亦官吏にあらず。茲に特別なる服従關係に立つ者と云へるは少しく説明の必要あるべし。即ち臣民として租税を納め若くは兵役に就くと云ふが如きは、共に國家に對する一種の義務たるに相違なれども、其義務は一般的に人民の負擔する義務にして本人の承諾不承諾を問はざる強制的の性質を有するものなり。然るに官吏は國家に對して特別の服従義務を負ひ、一旦官吏となりたる時は官吏法に支配せられて一身を擧げて國家の勞務に服する義務ある者なるを以て、國家が官吏として此義務を負はしむるには本人の承諾を必要とするものなり。官吏は此くの如く國家に對して特別の義務を負ふ代りに、一方に於ては特種の權利を有する者なり。官位を稱し制服を着くる榮

譽の權利及國家より俸給の支給を受くる權利等は是れなり。右は稍専門的の法律論に陥り通俗ならざるが如き觀あれども、茲に官吏を説くに當りては根本的思想として一應説明の必要もあり、且は亦國民として官吏の概念位は心得置きて然るべき事ならんと信じ、聊か説明を加へたる所以なり。

○官吏の種類

官吏は觀察點を異にするに従ひ種々の種類に分類することを得べし。先づ其職掌の區別に依りて分類すれば、文官と武官とに大別することを得。文官は之を大別して行政官及裁判官とし、尙他に技術官及學校職員等あり。武官は陸軍と海軍とに別れ、文官にして軍務省に屬する者を軍屬と稱して特に軍人に準して取扱ふことあり。次に階級に依りて官吏を分類すれば、勅任官、奏任官及判任官の三種に分たる。雇傭は官廳の傭人にして官吏にあらず。右は文官の階級制にして軍人に在ては、將官及相當官、上長官、士官、候補生、准士官、下士等に分たる。尙少しく詳述すれば、勅任官中最上の者を親任官とし、内閣總理大臣を始め各大臣、樞密院議長副議長及顧問官、全權大使、侍從長、式部長官、内大臣、朝鮮總督、臺灣總督、關東都督、鐵道院總裁等は即ち親任官なり。又軍人の將官中陸海軍大將は總て親任官なり。又高等官一等二等の者は親任官に次ぐ勅任官にして、各省の次官局長、全權公使、警視總監、貴衆兩院書記官長、高級參事官判檢事及知事、陸海軍中少將等之に列す。次で奏任官は高等官三等以下九等迄に分れ、判任官は月給額に依りて等級を分たる。此等各階級の用語を通俗に説明すれば、親任官は元首親ら任命し、勅任官は勅を奉じて任命し、奏任官は奏上して任命し、判任官は各所屬長官の判斷に依りて任命する者なり。又軍人の階級中、上長官は即ち佐官にして高等官三等以下五等に至り、士官は即ち尉官として高等官六等以下八等に至り、候補生は高等官待遇、准士官下士は判任官なり。

以上の分類の外通俗に政務官と事務官との區別あり、即ち國家の高級政治に與かる各國務大臣を政務官とし、其他の官吏を事務官とす。茲に國務大臣とは内閣を組織する大臣にして、現今に於ては宮内大臣を除きたる各大臣は即ち國務大臣なり、而して内閣總理大臣は其首班たり。

○官吏の特別なる身分

官吏となるの資格に就ては各種の官吏を説明するに當りて之を論ずべし、茲には官吏としての特別なる身分につき少しく説明する所あらんとす。既に論じたるが如く官吏は皆一身を捧げて國家の公の事務を處理する者なるを以て、國家は其生活を支持し且安固ならしむる爲め俸給を支給するの外、官位制服等の特別の榮譽を有せしめ、以て官吏の品格權威を保たしむ。殊に最近増俸後に於ける官吏は其収入も著しく増加し、所謂金と權とを併せ得たるの觀ありて國民中最も幸福なる境遇に在るものと謂ふべし。翻て義務の側より官吏を觀察すれば、官吏服務規律第一條に「凡そ官吏は天皇陛下及天皇陛下の政府に對して忠順勤勉を主とし法律命令に従ひ各其職務を盡すべし」とありて、陛下及上官の命令に服従して其職務を盡すべきは勿論、國家に對して最も忠實なることを要す。此忠實の義務の結果として或は官廳の祕密を嚴守し或は職務の妨害となるべき行為を避くるの義務あり、職務の妨害となるべき行為の中には、職務に關係ある個人の贈遺若しくは饗燕を受くること、下僚の贈遺を受くること、相場に關係すること、私立會社の無賃乗車券若しくは乗船券を受くること、營利會社の社長又は役員となること、商業を營むこと、外國の勳章俸給等を受くること等ありて、此中最後の三者は陛下又は長官の許可を得れば差支なきものとす。次に又官吏は國家の機關として人民に臨むものなるを以て、其品格を保持するの義務あり、故に官吏が犯罪ありたるときは自ら其職を失ふべきことは勿論、常に廉恥を重んじて貪汚の所

爲なかるべく、又は浪費して産を破り若くは身分不相應の負債をなすが如きは、官吏の品格を保つ所以にあらず。此等は皆官吏の特別なる地位に對して官吏の負擔する義務なりとす。

○官海の通弊

今日我國に於て官海の通弊として擧ぐべきもの甚多し、然れども要するに今日に於ける官海の通弊は官吏の頭腦の堅過ぐるに在り、俗に云は、融通の利かぬ點に在り。是れ蓋明治の制度の創建者が餘りに燦然たる典章を好んで何事も規則づくめに支配せんとしたるの餘弊に外ならず。例へば午前九時登廳午後四時退廳と云ふ規則あれば、官吏も亦小學兒童に立歸りたるが如く、四時の振鈴を聞くや直ちに筆を措いて起つの風あり。何事も此くの如く法律規則に拘泥するの結果、官吏の頭腦は自然に自由の活動を失ひて窮屈となり偏狹となり頑迷となり、隨て

繁文縟禮の風を生じ、意思の疏通を缺き、無用の誤解を惹起す等、其弊害擧げて數ふべからず。吾人は官省内に於て局と局、課と課とが反目嫉視して互に相執て下らず、爲めに大切なる事務の澁滯を醸しつゝあるは屢々耳にする所なり。又今日我國の形勢上海軍の擴張せざるべからざること勿論なれども、海軍にして一艦を増せば陸軍も亦一隊を増さんとし、爲めに時勢に應ずる十分の施設を策すること能はざるものありと謂ふ。此くの如きは恐らく齊東野人の言たるに過ぎざるべからんも、幾分か機微の消息を洩すものと謂はざるべからず。此等は皆官吏の頭腦が偏狹なる結果蝸牛角上の争をなしつゝあるものにして、爲めに國務の進涉を妨ぐるに幾許なるを知らざるなり。今や官吏の數は文官及雇傭員のみにても十五萬人以上に上り、之れに軍人(兵卒を除く)を加ふれば少くとも二十萬人に上らんとす。二十萬人と云へば、五千萬同胞の千分の四に相當す。若し婦人及小兒を除外すれば、社會に活動する男子中少くとも百人に二三人は官吏たるもの、如

し。少數の英敏なる治者と多數の勤勉なる人民とを有するの國家は必ず隆盛なるべし、故に官吏は成るべく少くして民間の人士は成るべく多きを可なりとす。此見地に於て吾人は今日の官吏に對して頭腦の開放を行ふことを得ば、其數を減少して五人は三人に二人は一人となして尙餘裕あるべきを思はずんばならず。官吏の頭腦の頑迷偏狹は嘗に事務を繁冗ならしむるのみならず、爲めに直接に人民の利益を侵害し或は人民の思想を惑亂するとあり、最も戒しめざるべからざるなり。殊に官威を妄用して國民を士芥視すが如きに至ては、所謂官尊民卑の弊にして最も厭ふべし。官吏服務規律には「官吏は職務の内外を問はず威權を濫用せず謹慎懇切なることを務むべし」とあり、官吏は宜しく謹慎懇切ならざるべからざるなり。吾人は將來官吏たらんとする青年諸子に向て、豫め戒しむる所なくんばあらざるなり。

第二節 政務官

○何をか政務官といふか

官吏中最高の位地に在る者は即ち政務官なり、故に吾人は先づ政務官に就て大要の説明を與ふべし。政務官とは既に述べたるが如く國家の高級政治に與かる最高の官吏を指稱する通俗語にして、之に對して他の官吏を事務官と稱す。今日政務官と稱すべき者は即ち内閣を組織する國務大臣にして、總理大臣は實に其首班たり。國務大臣とは法律上の用語にして必ずしも各省大臣と一致せず、現に我國に於て宮内大臣は國務大臣にあらず、陛下は又特別の勅旨を以て各省大臣以外に國務大臣を任命して内閣に列せしめらるゝ事あり。故に等しく大臣と云ふも、行政各部の長官たる各省大臣と内閣を組織する國務大臣とは區別せざるべからざるなり。故に各省大臣（宮内大臣を除く）は入ては國務大臣として大政に參畫し、

出で、は行政各部の長官として分掌の職務を行ふものとす。内閣が如何なる事を議するや、は細密に亘るを以て茲に之を省略せんも、要するに内閣員は元首を輔弼して大政を翼參するものなり。而して君主が法律命令を發する場合には内閣總理大臣及各主任大臣は輔弼の形式として之に副署すべし、副署とは君主の御署名に副へて署名することなり。

樞密顧問は國家重要な政務につき天皇の御諮詢に應ふる機關にして、一種の政務官なれども各國務大臣の如く大政施行の任に在るものにあらずして唯君主の御諮詢に應ふる顧問機關たるに過ぎず、故に通俗に政務官と云へは各國務大臣を指すものと解すべし。

○如何にして政務官たるべきか

内閣の制度は明治十八年十二月を以て初めて創建せられたるものにして、夫れ迄は所謂太政官制度なりしなり。内閣創設の際の太政官達に依れば「内閣總理大臣及外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の諸大臣を以て内閣を組織す」とあり。故に此等各省の大臣は當然國務大臣として内閣に列する資格あるものにして、即ち現今我國に於ては右の諸大臣となるにあらざれば内閣員たることを得ざるなり。而して右の諸大臣となるには一に君主の勅命に依るものにして、何等の特別なる資格を必要とせず。然れども實際に於て新に内閣を組織する場合には、君主は先づ總理大臣たるべき人物を選択して之に内閣の組織を命じ給ひ、總理大臣たるべき者は自ら適當の人材を簡拔して各大臣の候補者を作りて奏上し、君主にして之を嘉納せらるれば茲に初めて正式に各大臣の親任を見る順序なり。

○政務官に必要な素質

政務官は國家最高の官吏として大政を翼參する者なる以上は、國家の重きを其双肩に擔ふ底の人物ならざるべからざる事勿論なり。殊に内閣總理大臣は國務大臣の首班として最上の地位に立つ者なるを以て、政治家として國家第一の人材たるべき事を要す。又總理大臣以外の各國務大臣に至ては國務大臣として大政に參與するの外、或は内務、或は大藏等、各自行政の一部を分掌する者なるを以て、其分掌事務の長官として専門の智識を必要とす。然れども國務大臣として一般に必要な素質は、或は統御の才、或は計畫の才、或は事務の才等、才幹技倆の拔群なるべきこと勿論なれども、吾人が視て以て最も肝要なる素質となす所のものは、第一に身を以て國家に許すの誠意と、第二には内外時局の大勢を觀るの明となり。論語に所謂「可三以託六尺之孤、可三以寄百里之命」と云ふか如き純忠

至誠の大丈夫にあらずんば、焉ぞ國家の重きを託するに足らんや。内は國民の利害と趨向とを察し、外は列國との接觸點を明かにして、毫も遺策なきを期すべき大人物にあらずんば、焉ぞ亦國家の運命を左右するに足らんや。國務大臣たる亦難い哉。

○政務官の責任

國家の樞機に任ずる國務大臣の責任が重大なるべきこと論を俟たず、既に説明したるが如く國務大臣は君主を輔弼して大政を翼參する者なり。故に君主の發する法律命令に副署したる場合は勿論、其他重要な政務に就て輔弼の責任を負ふものとする。我國の憲法に「君主ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」とありて、君主は一國の主權者として法律以上に立つ人なるを以て、如何なる施政ありとも君主に責任あることなし。惡しき政治は總て國務大臣が輔弼の任を誤りたるものとして責任

を負ふものとす。英國の如き責任内閣の制度が完全に行はるゝ國に於ては、内閣は常に國民を代表する議會の信任を得ることを要し、假令事實上の秕政なきも内閣の施政が議會に於て多數の信任を得ること能はざる場合に於ては、内閣は直ちに責任を負ふて辭職すべきものとす。我國に於ては國情少しく英國と異り、議會に此くの如き大なる權力を認めず、隨て政黨政治及責任内閣制度は完全に行はれず、國務大臣も議會も均しく君主の下に立つ機關なるを以て、國務大臣が議會に對して責任を負ふと云ふことなく君主に對して責任を負ふものなるに依り、其進退は一に勅旨に出づべきものとす。然れども立憲政治の常として議會に於て多數の反對を受くるときは自ら國務の進歩に支障を生じ、勢君主に對して責任を負はざるべからざるに至るべし。要するに國務大臣が此責任を重んじて進退することは實に立憲政治家の徳義にして、十分に輔弼の責任を盡すこと能はずして尙其職に留まるが如きは、到底文明的の政治家と稱することを得ず、吾人は大臣の職務を重んじ其地位を光榮とすると同時に其責任も亦輕からざることを信するものなり。

○政務官と事務官

政務官事務官の區別が通俗の分類にして法規上此くの如き區別なきことは前にも一言したり。故に此區別は學理的に精密なるものにあらずとも、説明の便宜の爲め假りに此分類に依り説明を加へたるのみ。而して普通に事務官と稱するもの、中にも二種の區別あり、一は政務官に隸屬する者にして一は政務官に隸屬することなく獨立の官府をなすものなり。次官局長大使公使各府縣知事參事官等大多數の官吏は直接若くは間接に政務官に隸屬する事務官にして、宮内大臣、會計検査院長、裁判官等は政務官に隸屬せざる獨立の事務官なり。此中宮内大臣は帝室に關する一切の事務を處理する官吏にして、其事務の性質上通常政務以外

に特立するものとす。又會計検査院長は主として政府の收支決算を検査する官府の長官にして、天皇に直隸し國務大臣に對して特立の地位を有するものとす。裁判官（即ち判事）は又憲法上の司法權の獨立を維持する爲め、國務大臣の區處を受くることなく獨立して天皇の名に於て裁判をなすものとす。裁判は神聖なりとは此理由に出づ。

通例事務官は又之を分て行政官及裁判官とし、行政官は其範圍頗る廣く外交官と内務行政官とに大別せらる。尙學校職員及軍政に與らざる軍人の如きは、通俗に所謂事務官の中に包含せられざるものなり。政務官事務官の區別が精密ならざることは之に依るも明かなり。

第三節 行政官

○何をか行政官といふか

佛國の碩學モンテスキュー氏が唱道したる三權分立論は學說としては今日行はれざれども、其精神は現に文明諸國の採用する所となり、我國に於ても立法司法行政の三權限を分立せしめ、立法は君主の下に議會之を行ひ、司法は君主の名に於て裁判所之を行ひ、行政は君主の下に各行政官廳之を行ふものとす。行政官は即ち各行政官廳の官吏にして裁判官と異り、法律規則を適用することを目的とするものにあらずして國家若くは人民の幸福を増進することを目的とし、法律規則の適用の如きは此大目的を達する手段となすに過ぎざるものなり。

○行政官の種類

國家行政の範圍は頗る廣汎なるを以て行政官の種類も亦甚多し。各省大臣は即ち行政各部の長官にして、我現行の制度に依て之を分別すれば、外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信の各部に分れ、隨て外務行政、内

務行政、財務行政、軍務行政等各種の行政官を生ず。然れども文部農商務遞信の三者は内務行政の一部に屬し、唯事務の便宜上獨立の官省を置きたるに過ぎざるを以て、行政官は之を外交官、内務行政官、財務行政官、軍務行政官、司法行政官の五種に別つことを得べし。或は財務行政官及司法行政官は之を内務行政官中に包含せしむるも可ならん。而して普通に行政官と云へば内務行政官を指すものなり。吾人は此等各種の行政官中、外交官、内務行政官、及財務行政官につき其大要を説明すべし。(司法省の官吏及検事は司法行政官なり)

一 外交官 領事官

○何をか外交官といふか

外交官とは外務省に屬する官吏の總稱なるが如くなれども、外務省に屬する官吏委く外交官にあらず。外交官は外國に關する政務の施行に任ずる官吏なり、故に領事官は外交官にあらず、領事官の何者たるかは後に説明すべし。抑列國の交際が頻繁ならざりし時代に於ては外交官なる者なく、唯事件の起りたる場合に交渉の爲め使節を送り又は軍使を派遣することありたるのみ。初めて公使館を設けて常置の使節を駐劄せしめたるは第十五世紀に於て伊太利の諸國間に始まり、歐洲諸列國間に外交官駐劄の例を開きたるは十五世紀の中頃以後佛國王

が諸強國に公使を派遣したるに始まるもの、如し。今日に於て文明諸國は互に外交官を派遣し、以て本國と駐劄國との間の平和を保ち且駐劄國に對する本國の權利を保持し利益を増進することに努めつゝあり。

○何をか領事官といふか

國際間の商業關係は其外交關係が始まる以前に開始せらるゝを常とす、故に領事の制度は外交官の制度よりも早く發達し、古昔希臘の隆盛時代に於て既に

今日の領事に類する制度あり、其後十字軍起り又封建制度の衰頽と共に自由都市の續々發生するに及びて國際商業關係は益々頻繁となり、領事官の制度も亦大に發達したり。領事官は即ち外國に於ける本國商業の保護並外國に在留する本國人に關する諸般の事務を處理する官吏なり。尙或る外國に對して領事裁判權を有する國の領事は其國に於て本國人に對する裁判權をも有するものなり。

領事官の外最近に我國に於て商務官なるものを設け、外國に於ける商業上の關係を専門的に調査せしむることとせり、是れ我通商貿易の發達に關して大に肝要なる制度なり。

○外交官及領事官の階級

現時文明諸國間に於ける外交官の種類は、全權大使(Ambassador)、特命全權公使(Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary)、辨理公使(Minister Resident)

代理公使(Chargé d' Affaires)の四種なり。此中我國には常置の代理公使なるものなく、大使若しくは公使の留守中部下の外交官を臨時代理公使(Chargé d' Affaires ad Interim)として大使若しくは公使に代り外交事務を取扱はしむることあるのみ。此等諸種の外交官中全權大使特命全權公使及辨理公使は本國の主權者より駐劄國の主權者に宛てたる信任狀を以て任命せられ、代理公使は本國の外務大臣より駐劄國の外務大臣に宛てたる書簡に依りて其國に駐劄するものとす。就中大使は本國主權者の身體及威嚴を代表するものと看做され、全權公使以下は唯本國政府を代表するものと看做さる。故に大使は外交官の最上席に位する者にして、或國が大使を派遣せんとするも慣例上對手國の同意なければ之を派することを得ず、事實上強國の名あるものにあらざれば互に大使を派遣せざる有様にして、現今に於ては英米獨佛奧露伊の七大強國及我日本の九ヶ國間に於て互に大使を派遣しつゝあり。又同種の外交官の間に於ては駐劄日附の先きなる者を上席とする慣